

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第602集

なか たい
中平遺跡発掘調査報告書

村道拡幅事業関連遺跡発掘調査

2012

野田村

(公財)岩手県文化振興事業団

中平遺跡発掘調査報告書

村道拡幅事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手県九戸郡野田村の村道拡幅事業に関連して平成22年度に発掘調査を実施した、中平遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査で本遺跡は、縄文時代には狩猟場、奈良時代から平安時代にかけては集落が営まれていたことが明らかとなりました。特に古代の堅穴住居跡から出土した遺物は、岩手県沿岸北部の古代集落の様相を考える上で貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました野田村地域整備課、野田村教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成24年3月

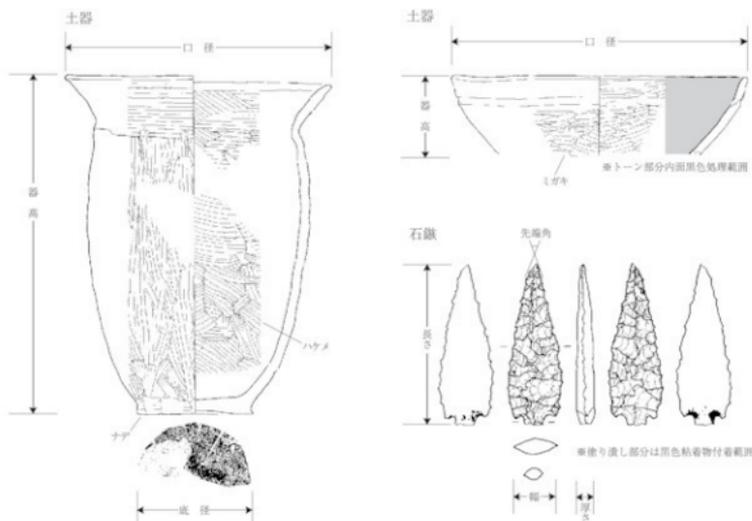
公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 池田克典

例 言

- 1 本報告書は、岩手県九戸郡野田村第13地割84番地121ほかに所在する中平遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、村道拡幅事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は野田村地域整備課と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、野田村地域整備課の委託を受けた（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（当時。平成23年4月1日より公益財団法人。）が実施した。
- 3 本遺跡の岩手県遺跡台帳における遺跡コードはJG60-0258、遺跡略号はNT-10である。
- 4 野外調査及び室内整理期間、調査担当者は次の通りである。
野外調査 期 間 平成22年9月1日～10月29日
面 積 2,736㎡
担当者 北田 勲・北村忠昭
室内整理 期 間 平成22年12月1日～平成23年2月28日
担当者 北田 勲
- 5 本報告書の作成は、北田が本文原稿、遺構・遺物図化を行った。またI調査に至る経過は野田村地域整備課、V自然科学分析は1を株式会社加速器分析研究所、2を弘前大学が行った。全体の編集は北田が行った。
- 6 分析・鑑定、座標原点の測量は次の機関等に委託した。
 - ・炭 化 材 同 定……………岩手県木炭協会
 - ・放射性炭素年代測定……………株式会社加速器分析研究所
 - ・テ フ ラ 分 析……………弘前大学大学院理工学研究科柴正敏・長沢知周
 - ・座 標 原 点 の 測 量……………有限会社共栄測量
- 7 本書では以下の地形図・地質図を使用した。
 - ・「1/25,000地形図 陸中野田」、「1/50,000地形図 陸中野田」（国土地理院）
 - ・「地形分類図 陸中野田」「土地分類基本調査 陸中野田」（岩手県）
 - ・宮内崇裕 2001 「陸中野田図」「日本の海成段丘アトラス」 東京大学出版会
- 8 野外調査及び本報告書の作成にあたり、次の機関・方々から御指導・ご助言・ご協力をいただいた（敬称略）。
野田村教育委員会
- 9 発掘調査資料は、全て岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 10 調査成果の一部については、平成22年度発掘調査報告書調査概報（岩埋文第588集）等に発表してきたが、本書の記載内容が優先するものである。

凡 例

- 1 遺構図の用例は次の通りである。
 - (1) 遺構実測図の縮尺は竪穴住居跡の平面・断面図1/40、カマド平面・断面図1/20、土坑・陥し穴状遺構・柱穴状ピット平面・断面図1/40で表した。ただし規模の関係上これに合わないものもあるため、各図版にスケール及び縮尺を付した。
 - (2) 推定線は破線で表した。また、遺構同士の切り合いは線種を変えて表現した。
 - (3) 層位は、基本層序にローマ数字、各遺構堆積土などにアラビア数字を使用した。
 - (4) 土層色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。
 - (5) 遺構図中の「RP」は土器、「S」は礫を表している。
- 2 遺物実測図の用例は次の通りである（凡例図参照）。
 - (1) 遺物実測図の縮尺は土器1/3、石器・金属製品2/3で表した。
 - (2) 土器の黒色処理は、内面にスクリーントーンで示した。
- 3 写真図版の用例は次の通りである。
 - (1) 遺構写真図版については、基本的に平面及び断面写真をセットとし掲載した。
 - (2) 遺物写真図版については、縮尺は基本的に遺物実測図に準じている。



遺物凡例図

目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の立地・環境	1
1	遺跡の位置	1
2	遺跡の地形環境	3
(1)	遺跡の成立過程	3
(2)	調査区と周辺の地形	4
(3)	調査区の層序	4
3	歴史的環境・過去の調査	5
III	調査・整理の方法	8
1	野外調査方法	8
(1)	調査方法	8
(2)	調査経過	8
2	整理方法	9
(1)	遺構の整理	9
(2)	遺物の整理	9
(3)	遺物写真撮影	9
(4)	整理経過	10
3	広報活動	10
IV	検出した遺構と遺物	11
1	全体の概要	11
2	縄文時代	11
(1)	土坑	11
(2)	陥し穴状遺構	11
3	古代	22
(1)	竪穴住居跡	22
(2)	土坑	38
(3)	溝跡	38
4	古代以降・時期不明	40
(1)	土坑	40
(2)	溝跡	40
(3)	柱穴状ピット	42
5	遺構外出土遺物	44

V	自然科学分析	50
1	中平遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	50
2	中平遺跡出土の火山灰について	53
VI	調査のまとめ	55
1	縄文時代	55
2	古代	55
3	古代以降	56
4	中平遺跡の古代遺構の位置付け	56
	報告書抄録	85

図版目次

遺物凡例図		第16図	2号竪穴住居跡(2)	28
第1図	遺跡位置図	第17図	3号竪穴住居跡	30
第2図	地形分類図	第18図	4号竪穴住居跡	31
第3図	基本層序柱状模式図	第19図	5号竪穴住居跡(1)	32
第4図	周辺の遺跡図	第20図	5号竪穴住居跡(2)	33
第5図	遺構配置図(全体)	第21図	6号竪穴住居跡	34
第6図	遺構配置図(西区)	第22図	7号竪穴住居跡	35
第7図	遺構配置図(東区)	第23図	8号竪穴住居跡	37
第8図	1号土坑、1・2・4号陥し穴状遺構	第24図	2・3号土坑、1号溝跡	39
第9図	3・5・7号陥し穴状遺構	第25図	4号土坑、2～5号溝跡	41
第10図	6・8～10号陥し穴状遺構	第26図	柱状ビット群	43
第11図	11～13号陥し穴状遺構	第27図	1～3号竪穴住居跡出土遺物	45
第12図	14号陥し穴状遺構	第28図	3～5・7号竪穴住居跡、2号土坑、1号溝跡出土遺物	46
第13図	1号竪穴住居跡(1)	第29図	11号陥し穴状遺構、遺構外出土遺物	47
第14図	1号竪穴住居跡(2)	第30図	遺構分布図(昭和40・41年調査含む)	57
第15図	2号竪穴住居跡(1)			

表目次

第1表	周辺の遺跡	7	第4表	石器観察表	49
第2表	柱状ビット計測表	47	第5表	金属製品観察表	49
第3表	土器観察表	48	第6表	出土炭化物観察表	49

写真図版目次

写真図版1	野田村撮影航空写真(平成8年撮影)	61	写真図版14	4号竪穴住居跡	74
写真図版2	米極東空軍撮影航空写真(昭和23年5月16日撮影)	62	写真図版15	5号竪穴住居跡(1)	75
写真図版3	国土地理院撮影航空写真(昭和43年9月13日撮影)	63	写真図版16	5号竪穴住居跡(2)	76
写真図版4	1号土坑、1～3号陥し穴状遺構	64	写真図版17	6号竪穴住居跡	77
写真図版5	4～7号陥し穴状遺構	65	写真図版18	7号竪穴住居跡	78
写真図版6	8～12号陥し穴状遺構	66	写真図版19	8号竪穴住居跡	79
写真図版7	13-14号陥し穴状遺構、遺構検出風景	67	写真図版20	2～4号土坑	80
写真図版8	1号竪穴住居跡(1)	68	写真図版21	1～3号溝跡	81
写真図版9	1号竪穴住居跡(2)	69	写真図版22	4・5号溝跡、柱状ビット群	82
写真図版10	1号竪穴住居跡(3)	70	写真図版23	1～3号竪穴住居跡出土遺物	83
写真図版11	2号竪穴住居跡(1)	71	写真図版24	4・5・7号竪穴住居跡、2号土坑、1号溝跡、11号陥し穴状遺構、遺構外出土遺物	84
写真図版12	2号竪穴住居跡(2)	72			
写真図版13	3号竪穴住居跡	73			

I 調査に至る経過

中平遺跡は、「村道城内二又線改良舗装事業」の道路改良工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

村道城内二又線は、野田村横町地区を起点とし、中平地区、沢山地区を経由し日形井地区に至る延長5.4kmの幹線道路である。本事業は、現道における交通安全の確保と歩行者等の安全性の向上を図るとともに、幹線道路である本路線の年間を通じた機能向上を図ることを目的として整備するものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、野田村から平成21年7月3日付け野地第126号「土木事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成21年7月9日試掘調査を実施し、工事に着手するには当該遺跡の発掘調査が必要となる旨を、平成21年7月22日付教生第593号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答してきた。

その結果を踏まえて当村は、岩手県教育委員会の調整を受けて、平成22年8月31日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（野田村地域整備課）

II 遺跡の立地・環境

I 遺跡の位置

中平遺跡は岩手県九戸郡野田村第13地割84番地121ほかに所在し、国土地理院発行50,000分の1地形図「陸中野田」の図幅に含まれ、北緯40度06分02秒、東経141度48分37秒に位置する。

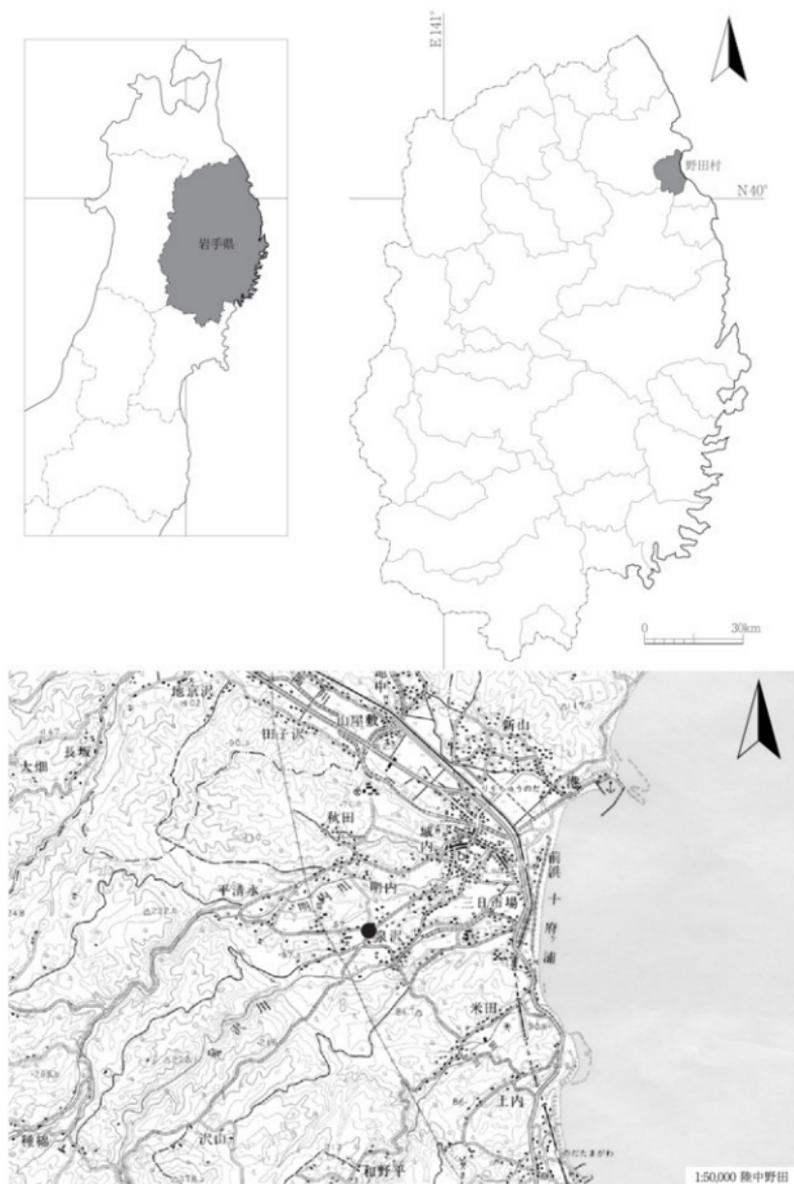
遺跡は、野田村役場の南西約1.8kmの場所にあり、北上高地東端から半島状に延びる標高60～25mの台地上にあり、北側を明内川、南側を泉沢川に挟まれる。現況は宅地及び畑地である。

野田村は岩手県の北東部、九戸郡内では南東端に位置している。北～西部は久慈市、南部は下閉伊郡普代村・岩泉町に接し、東部は太平洋に面した東西約11.3km、南北約13.8km、総面積は80.83km²ある。西部は北上高地に属し、東は海岸段丘が続く。宇部川・泉沢川・玉川・安家川などの河川が西から東へ流れ、太平洋に注ぐ。宇部川・泉沢川の下流域にわずかに平地が見られるが、8割近くを山林原野が占める。

主な産業は漁業で、野田・玉川・下安家の三港が第1種漁港に指定されており、サケ・マスの放流事業やホタテ貝の地まきなど養殖漁業が盛んに行われている。この他に、高原地帯では酪農と養豚の主産地化が進められている（岩手県の地名、日本歴史地名大系3 1990平凡社）。

人口は5,019人（平成17年国勢調査）で、岩手県全体の0.36%を占めている（1990平凡社・野田村HPから引用）。

1 遺跡の位置



第1図 遺跡位置図

2 遺跡の地形環境

(1) 遺跡の成立過程

遺跡の所在する野田村は、南北に長い卵形をした北上山地の東側を縁取る三陸海岸北部地域に位置する。

三陸海岸の海岸線の北半部は、あまり細かな湾入が見られず、切り立った海食崖が続くのに対し、宮古より以南では海岸線は屈曲に富み、数多くの湾入と岬が連なるリアス式海岸が発達する。

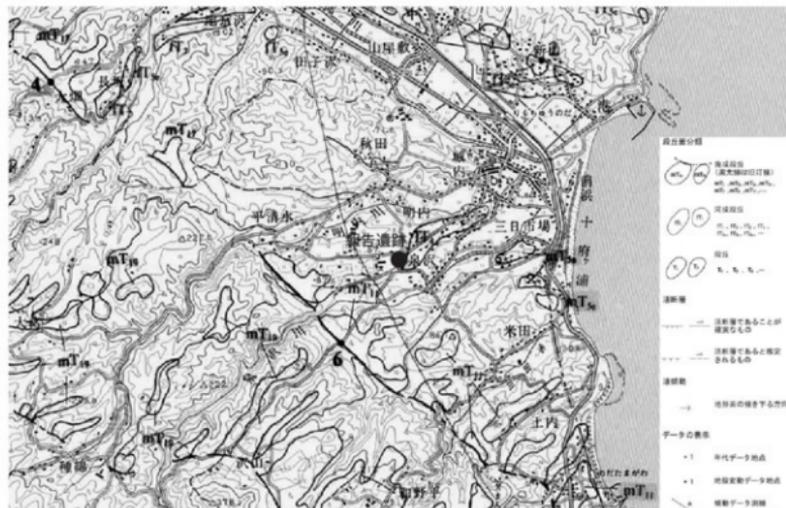
三陸海岸北部と南部の地形的差違は、鮮新世末を中心に進行した北上山地の曲隆に伴う海岸部の沈降が南部ほど大きかったことが最大の要因となっている。さらに海岸部が隆起に転じ、海成段丘の形成されはじめる中期更新世以降、海成段丘群の分布から推定すると、北部ほど隆起量の大きい傾動運動（宮古南方では沈降傾向）が進行したと推定される。

北部の海岸部は、中・古生層の硬岩からなる南部海岸に比較し、侵食されやすい花崗岩や白亜紀層が海食台形成に好都合であったと推定される（2005 小池）。

このように、三陸海岸北部では、海食崖の発達する直線的な海岸線と、その背後に更新世中・後期の海成段丘群が発達する。このため、海岸に沿っては広い台地状の平坦地が開け、河川は深い谷となって海に注いでいる（2005 小池・宮内）。

三陸海岸北部の野田村野田地域はまさに典型的で、やや弧を描く海岸線である十府ヶ浦の背後には水無面からなる海成段丘群が発達し、本遺跡が乗る台地状の平坦地が開けており、また明内川や泉沢川によって開析された河岸段丘が河川沿いに認められる地形となっている。北側の野田港付近や南側の玉川などは海食崖が発達している。

遺跡付近の地形は、西側の野田中学校付近は海成段丘から下る斜面地を形成しているが、東側の住宅地付近は明内川右岸の河岸段丘となり地形はほぼ平坦に変化する。県指定史跡の範囲は、海成段丘の平坦部に立地していると見られる。



第2図 地形分類図

宮内 2001 から加筆転載

小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城豊彦編 2005 『日本の地形3 東北』（株）三秀舎

小池一之 2005 「2-2 リアス海岸の発達する三陸海岸」『日本の地形3 東北』（株）三秀舎

宮内崇裕 2005 「2-2 (2) 北上山地北部を削り込む高位段丘群」『日本の地形3 東北』（株）三秀舎

(2) 調査区と周辺の地形

調査区の現況は学校グラウンド造成地、給食センター造成地、宅地及び畑地である。調査区西側の学校グラウンド造成地は、造成する際に旧地形の東向き緩斜面地を平坦に造成した法面部分である。大半は著しく削平されており、旧地形を確認することは出来ないが、調査区北端の村道脇や室内練習場脇などは旧地形との比高差が少なく、旧地形面に近い傾斜が確認できる。グラウンドは重機などで掘削後に厚さ40～100cm程の砂を敷き詰めており、特に東半で認められる。東半部は開削した土砂を盛土として敷設したと考えられ、旧地形の上に5m程度埋め立てたと思われる。また、給食センター部分についても、同様の開削工事が行われており、これらの箇所が存在したと思われる埋蔵文化財は消失していると考えられる。

調査区東側の宅地及び畑地部分については、近年の上下水道管など住宅配管工事によって破壊されているものの、西側に比べては比較的良好に残存している。

遺跡範囲は明内川と泉沢川に挟まれた台地状の河岸段丘面であるため、東区のみで見れば、傾斜は緩やかである。前述したが、地形の変換点は給食センター付近と見られ、西側の野田中学校付近は海成段丘から下る斜面地を形成しているが、東側の住宅地付近は明内川右岸の河岸段丘となり地形はほぼ平坦に変化する。

(3) 調査区の層序

本遺跡全体の基本層序は以下の通りである。第3図に基本層序柱状模式図を示した。

I層 表土（耕作土・宅地造成土・盛土） 10～50cm

II層 黒褐色土 0～20cm

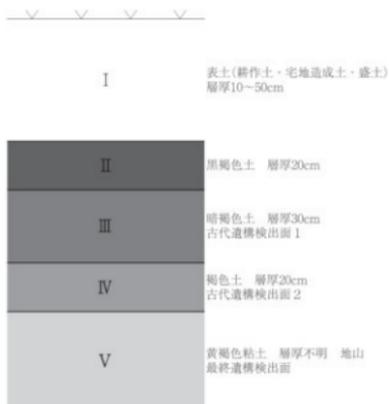
III層 暗褐色土
0～30cm（古代遺構検出面1）

IV層 漸移層
0～20cm（古代遺構検出面2）

V層 黄褐色粘土
層厚不明（最終遺構検出面・地山）

I層は畑地の耕作土や宅地を造成・撤去した際の攪乱土、グラウンド造成時の盛土などである。西区はグラウンド造成時の切土及び砂・碎石・粘土などの盛土、東区は宅地造成に係わる攪乱土が大半で、東区東側に畑地が密集する箇所は耕作土である。東区の表土は東に向かうほど厚くなる傾向にある。これは、緩斜面地を平坦化するためと考えられる。

II層黒褐色土は旧表土と思われる層で、堅穴



第3図 基本層序柱状模式図

住居跡の上位層に存在する。中平遺跡で確認されている竪穴住居跡の多くは、黒ボク土が未発達なために完全に埋没しきらずに窪地を呈していた。昭和40年の草間俊一氏の分布調査の際にもこの状況は少なからず確認されている（1967 草間）。本層位は長年表土として存在していた層位で、近年の開墾により人為的に埋め立てられた箇所も存在すると考えられる。

Ⅲ層暗褐色土は、古代遺構検出面で古代遺構の堆積土の主体を成す層である。層厚は0～30cm程度、調査区東側のほぼ全域で確認される。

Ⅳ層はⅢ層暗褐色土とⅤ層黄褐色粘土の漸移層で、褐色土主体である。地点によっては粘土質を呈する。層厚は約0～20cm、調査区東側のほぼ全域で確認される。

Ⅴ層黄褐色粘土は、最終の遺構検出面であり、縄文時代の陥し穴状遺構などが認められる。調査区の大平で確認される。層厚は不明であるが、陥し穴状遺構の断面からは90cm前後と思われる。これより下層には、褐色砂質土が層厚20cm、さらに下層には褐色砂質土に加えて、10～15cm大の垂角礫が多量に混入する。

3 歴史的環境・過去の調査

岩手県遺跡台帳（平成21年12月31日）によると、野田村には43箇所の遺跡が登録されている。野田村の登録箇所すべてと、久慈市宇都町の17箇所を含む計60箇所を第4図に掲載した。

周辺の遺跡については、既刊の報告書により詳細に記載されているため割愛し（野田村教委1987・岩埋文2004）、本遺跡の過去の調査を述べる。

中平遺跡は、昭和27（1952）年に野田中学校校舎新築のための整地工事の際に、多量の土器が出土したことから、岩手県文化財専門委員であった伊東信雄、田中喜多美両氏によって竪穴住居跡2址が調査された（伊東・田中1956）。これに基づいて昭和29（1954）年4月5日、中学校西側の村有林野約700aが「野田竪穴住居址群」として県指定史跡となった。

その後、昭和40（1965）年4月と7月に2回、昭和41（1966）年3月に1回の調査が岩手大学教養学部草間俊一氏によって行われている（草間1967）。昭和40年7月は竪穴住居跡5棟が調査され、一辺が4～6mの隅丸方形で、北辺にカマド1～2基が設置されることが確認されている。出土遺物は、土師器・須恵器・砥石・鉄製品・青銅器・琥珀玉などがある。草間は出土土器をAⅠ（須恵器・ロクロ成形の土師器が伴出）とAⅡ（有段丸底の坏など非ロクロ成形の土師器）、B（縄文土器・弥生土器）に分類し、土師器時代と須恵器土師器が共存する時代が存在することを指摘している。その上で、大半が後者の平安時代に属する住居であるとし、律令時代の大集落の存在を報告している。

また、昭和41年3月の調査では、竪穴住居跡と推定される窪地の分布調査が行われ、計185箇所が確認されている（第30図に加筆引用）。

近年では、平成21年10月13～23日にかけて、村下水道事業に係る調査が岩手県教育委員会によって行われ、幅1mの狭小な調査区から、古代の竪穴住居跡13棟、土坑4基、溝跡6条、柱穴状土坑4個を検出している（岩手県教委2011）。

伊東信雄・田中喜多美 1956 『岩手の文化財』 岩手県教育委員会

岩手県 2009 『岩手県遺跡台帳』

岩手県教委 2011 『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成21年度）』 岩手県文化財調査報告書第132集

岩埋文 2004 『平清水Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第449集

草間俊一 1967 『野田村中平遺跡』 『Artes Liberales』 2 岩手大学

野田村教委 1987 『古館山』 野田村文化財調査報告書



第4図 周辺の遺跡図

第1表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	遺跡コード	史料区分	時代	遺産種・遺物	所在地	備考
1	野田型瓦(中平)	集落跡	J G60-0208	野田村	古代	土師器、灰意瓦、鉄器	野田村大字野田第22地割	昭和26.4.調査指定史跡 J121.10.13～11.21.10.25発掘調査(堀 野田村教委・日本考古学協会 主催 1965) 野田村中平遺跡(野田村教委1967) 野田村教委 年報 (1969) 1970年18 (1)巻頁12103 【中平・土師内調査発掘】(野田村教委 1970) 考古学要聞 N o.26 (1970年12月)
2	大平野		J G60-0306	野田村	縄文・古代	竊土穴、土坑、遺跡	野田村大字野田第13-15地割	J121.12.7～121.12.10発掘調査 野田村教委 年報 (1970) 遺跡 第2-2区画-60野田 (1981-1984) 野田村史蹟刊 (野田村 1987) 野田村史蹟刊 3巻 (遺跡 1987)
3	古瀬山	集落跡	J G61-0003	野田村	縄文・古代	土師器、縄文(前期) 家瓦、柱跡	野田村大字野田	J121.12.7～121.12.10発掘調査 野田村教委 年報 (1970) 遺跡 第2-2区画-60野田 (1981-1984) 野田村史蹟刊 (野田村 1987) 野田村史蹟刊 3巻 (遺跡 1987)
4	古瀬	城跡跡	J G61-0003	野田村	中世	堀	野田村大字野田	539年調査、遺構
5	古瀬総合堀	堀跡跡	J G61-0005	野田村	中世	堀跡跡	野田村大字野田	539年調査、遺構
6	野田堀	堀跡跡	J G50-2366	野田村	中世	堀 (7)	野田村大字野田字伏津沢	539年調査
7	伏津堀	堀跡跡	J G50-2353	野田村	中世	堀	野田村大字野田字伏津沢	539年調査
8	西堀	堀跡跡	J G50-2327	野田村	中世	平場、惣堀	野田村大字野田字城内	539年調査
9	平湯木1	散佈地	J G60-0241	野田村	縄文	縄文土器(後期)、土器	野田村大字野田第22地割	1970年(1969) 古文書第12巻(野田教委2001) 遺構
10	平湯木2	散佈地、集落跡	J G60-0224	野田村	縄文・古代、平安	縄文土器(前後期) 土師器、石鏡、石 鏝、磨石等石、石製農具、磨石付居 跡、住居状遺構、フラスコ状土坑	野田村大字野田第22地割	J13.8-10発掘調査(野田教委 2000) 古文書 第2-2区画-60野田 (1981-1984) 古文書第121 (野田教委 2001) 古文書第12巻第49巻(古文書 2004) 遺構
11	平湯木3	散佈地	J G60-2275	野田村	古代	土師器	野田村大字野田第22地割	J12.6.98調査
12	野六堀(遠見墓所)	堀跡跡	J G51-1192	野田村	土器	土器	野田村大字野田第120-120	539年調査
13	中瀬山	散佈地	J G51-1032	野田村	縄文・古代	土師器、縄文土器	野田村大字野田字中瀬山	1970年(1967) 古文書第12巻(野田教委 2000)
14	上新山	集落跡	J G50-1308	九志市	古代	土師器、磨石付居跡	九志市字御所15	539年調査
15	山田敷	集落跡	J G50-0361	九志市	縄文・弥生・古代	縄文土器、弥生土器、土師器、磨石付 居跡	九志市字御所10	549年調査、J13調査拡大
16	田中沢	散佈地	J G50-1200	九志市	縄文	縄文土器(後・前期)、石器	九志市字御所7地割	
17	地蔵沢1	散佈地	J G50-0171	九志市	縄文	縄文土器(後期)	九志市字御所第6地割	
18	地蔵沢2	散佈地	J G50-0097	九志市	縄文	縄文土器(後期)	九志市字御所第6地割	
19	宇瀬山(八幡宮)	城跡跡	J G60-0028	九志市	中世	二重堀、土塼、草葺、堀跡	九志市字御所3	
20	十三塚	散佈地	J G49-2072	九志市	縄文	縄文土器(後期)、石	九志市字御所第3地割	
21	山内	散佈地	J G41-2192	野田村	縄文	縄文土器(中期)、竊土	野田村大字野田字山内	1970年(1966) 1970年19 (1)巻頁1921
22	丸沼1	散佈地	J G41-2178	九志市	弥生	弥生土器	九志市字御所第2地割	
23	丸沼2	散佈地	J G41-2166	九志市	縄文・古代	縄文土器(前期)、土師器	九志市字御所第2地割	
24	丸沼3	散佈地	J G41-2291	九志市	縄文	縄文土器(後・前期)、石鏡、磨石	九志市字御所第3地割	
25	丸沼	散佈地	J G41-2282	九志市	縄文	縄文土器(後・中期)、石鏡、磨石	九志市字御所第2地割	
26	丸沼1	集落跡	J G41-2291	九志市	縄文	縄文(後・中期) 土器	九志市字御所第2地割	
27	丸沼2	集落跡	J G41-1284	九志市	縄文・弥生	縄文土器(中・前期)、弥生土器、竊 土穴状遺構	九志市字御所第2地割	532年調査
28	丸沼3	散佈地	J G41-1342	九志市	縄文	縄文土器(後・前期)、石器	九志市字御所第2地割	
29	丸沼4	散佈地	J G41-1228	九志市	縄文	縄文土器(中・後期)、石鏡、石斧	九志市字御所第2地割-24	
30	丸沼5	散佈地	J G41-1166	九志市	縄文	縄文土器、弥生土器下、ブレイク	九志市字御所第19地割	
31	丸沼山	集落跡	J G41-1379	九志市	縄文	縄文土器(前・中・後期)、石斧	九志市字御所第2地割	
32	山内1	散佈地	J G60-2134	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田7-116地	
33	山内2	散佈地	J G60-2148	野田村	弥生	弥生土器(磨石?)	野田村大字野田7-80地	
34	山内3	散佈地	J G60-2244	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田7-59地	
35	御所平1	散佈地	J G60-2375	野田村	縄文	縄文土器(中期)、石鏡、石刀、石鏝	野田村大字野田	
36	御所平2	散佈地	J G60-2286	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田第8-228地	
37	御所平3	散佈地	J G60-2332	野田村	縄文	縄文土器(後・中期)	野田村大字野田第8-212地	
38	御所平4	散佈地	J G60-2332	野田村	縄文	石器(鎌)	野田村大字野田第8-219地	
39	御所平5	散佈地?	J G70-0204	野田村	縄文	縄文土器(後期?)	野田村大字野田第8-262地	
40	御所平6	散佈地	J G70-0218	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田第8-242地	
41	御所平7	散佈地	J G70-0222	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田第8-174地	
42	御所平8	散佈地	J G70-0292	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田第8-254地	
43	御所平9	散佈地	J G70-0286	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田第8-262地	
44	帆立貝塚	集落跡、貝塚	J G71-2071	野田村	縄文	縄文土器(後期)、石鏡、石鏝、磨石 のツブ	野田村大字野田	考古学ジャーナル No.231 (No.1-9) イニエス社1984)、小畑野・高橋・橋 谷(1981-1984)
45	帆立貝塚東	貝塚?	J G71-2062	野田村	縄文	縄文土器(後期)、土師器	野田村大字野田1	
46	帆立貝塚西	貝塚?	J G70-2289	野田村	縄文	縄文土器(後期)、土師器	野田村大字野田1-48-6地	
47	帆立1	散佈地	J G70-2319	野田村	縄文	縄文土器<最少含む>>	野田村大字野田1-159	
48	帆立2	散佈地	J G71-2031	野田村	縄文	縄文土器(?)	野田村大字野田1-48-6地	
49	帆立3	散佈地	J G71-2091	野田村	縄文	縄文土器(後期)	野田村大字野田1-48-4地	
50	帆立4	散佈地	J G71-2066	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田1-171地	
51	帆立5	散佈地	J G71-2066	野田村	縄文	縄文土器(後期)、磨石<最少含む>>	野田村大字野田1-171地	
52	帆立6	散佈地	J G71-2068	野田村	縄文	縄文土器、磨石<最少含む>>	野田村大字野田1-171地	
53	帆立7	散佈地	J G71-2065	野田村	縄文	磨石付石	野田村大字野田1-300地	
54	帆立8	散佈地	J G71-2140	野田村	縄文	縄文土器(後期)、<最少含む>>	野田村大字野田1-172地、 大字野田1-154地	
55	帆立9	散佈地	J G71-2143	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田1-43-40地、 大字野田1-43-39地	
56	帆立10	散佈地	J G71-0032	野田村	縄文	縄文土器(?)	野田村大字野田5-112地	
57	山内堀	集落跡、城跡跡	J G71-0112	野田村	縄文・中世	縄文土器(?)、堀切	野田村大字野田字山内	
58	山内堀南1	散佈地	J G71-1142	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田1-349地	
59	山内堀南2	散佈地	J G71-1134	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田1-349地	
60	山内堀南3	散佈地	J G71-1165	野田村	縄文	縄文土器	野田村大字野田1-329地	

Ⅲ 調査・整理の方法

1 野外調査方法

(1) 調査方法

調査方法については、大型遺構の調査は四分法で、その他の遺構については原則的に二分法で行い、それぞれ堆積土層観察用のセクションベルトを設け、土層を観察しながら精査を進めた。

この際、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の完掘状況を中心に写真撮影及び実測を随時行った。実測はCUBIC社製遺構実測ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる測量を行った。

遺跡・遺構・現場出土遺物の写真撮影については、キャノンEOS 50D（デジタルカメラ・1,510万画素）と中判マミヤ6×4.5cm（モノクローム）を使用した。

遺構実測図の縮尺は1/20を基本としたが、堅穴住居跡カマド・微細図は1/10、その他の遺構や土層断面なども種類や規模により1/40、1/100などの縮尺を用いて遺構実測図（第一原因）を作成した。なお調査の進行上、土層断面の写真や実測を省略し、状態の記録や計測等のみに留めた遺構もある。

遺物の取り上げ方は、遺構内出土分については出土遺構名と出土層位を記した。遺構外遺物は地区名・基本層位を記入して取り上げた。

(2) 調査経過

調査は調査の進行上、野田中学校側を西区、野田役場側を東区として設定した。

9月1日から調査を開始した。調査区の大半が村道に面しており、西区は中学校敷地内、全体に野田中学校の通学路であるため、道路使用許可の届け出や防護柵設置など安全対策を実施した。また、東区の多くは住宅の入口や庭先、宅地敷地内であるため、周辺住民に対する調査説明（調査着手時期のお知らせや順序、埋設物の確認など）を随時実施した。

9月2、6日にはNTTによる高架線切断防止の目印設置を行った。東区は上物（住宅擁壁・水道管・下水道管・垣根・舗装・ゴミステーション・消火栓・電柱・作物など）の支障物件が多いことから、まず西区桜並木部分の試掘から着手した（9月2～9日）。本来ならば調査区内の立木などは伐採した上で調査を行うべきであるが、年度内の伐採・移植予定がないことから立木を残す形での調査となった。まず始めに立木の間を中心に1m幅のトレンチ14本を設定した（T1～14）。大部分のトレンチではグラウンド造成の際に切土され、その上に粘土・砂による盛土がされていることが確認された。切土上部の旧地形が残存している中央T8付近で土坑・陥し穴状遺構を検出したため、この部分についてのみ面的な表土除去し、拡がりを確認した（約50㎡）。これ以外については、トレンチの拡張及び増設により堆積状況・遺構の有無を確認し、写真記録・フィールドカード記載のみで調査を終了した。

9月6日に東区西端の試掘、9～16日に東区西端～ゴミステーションまでの人力・重機による表土除去を行った。排土については狭小な調査区のために事業用地内に排土場を確保できなかったことから、約1km先の（株）晴山組の排土仮置き場まで2または4tダンプトラック1～2台で搬出した。ゴミステーション西側の畑地部分は表土が薄いため、人力による表土除去を行い、9月10日に堅穴住居跡2棟や溝1条・土坑・柱穴状ピットなど各種を検出したため、この箇所精査を開始した。ちなみにこのエリアは遺構が最も集中していたため、調査終盤まで精査を行った（9月14日～10月27日）。

9月14日に東区西の宅地庭部分の表土除去、9月15日から検出・精査を始めたが、堅穴住居跡が住宅擁壁直下に確認され、カマド部分がちょうど直下となることからコンクリート擁壁を切断することになった(10月7・8日)。

また、ゴミステーション下にも遺構が延びることから、9月15日～10月5日の間に東側の精査を行い、10月6・7日に埋め戻し作業、10月7日にゴミステーションの移設を行った。筆界未定地西側の住宅庭・垣根部分は9月14日に表土除去、9月15日に検出、9月16日～10月8日に精査を行った。

9月29～30日は筆界未定地東側の試掘、表土除去、10月1～8日は東区東住宅前～畑地までの表土除去を行った。

10月5～13日に筆界未定地東の精査、10月12～26日に東区東住宅前周辺の精査を住宅入口の切替などを並行しながら進めた。合わせて、10月13～27日に東区東畑～ビニールハウス前部分の検出・精査を行っている。

10月25日に県生涯学習文化課・野田村・当センター三者による終了確認。精査終了部分については随時排土による埋め戻しを行っていたが、10月25・26・28・29日の4日間で全面的な埋め戻しを行い、10月29日に器材を撤出しすべての調査を終了、撤収した。

2 整理方法

(1) 遺構の整理

遺構は現場で図化してきた遺構図データを元に、註記や遺構の切り合い、配置などを検討しながら担当調査員が遺構ごとに修正データを作成し、レイアウトを行った。

遺構図版は時代ごとに堅穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、溝跡、柱穴状ピットの順で掲載した。遺構名は現場段階で命名しており、登録抹消となった場合は欠番としている。

(2) 遺物の整理

遺物は種類ごとに大別し、掲載遺物・要観察遺物を選別した上で登録番号を付けた。

本報告書掲載にあたっては、これらに掲載番号を付し、図版番号・写真図版番号も合わせて記載している。観察表の()内数値は残存値、[]内数値は推定値である。

土器は水洗乾燥後、仕分け、収納袋ごとに破片数及び重量計測を行った。次に註記、遺構・層位・グリッドごとに仕分けを行い、接合作業を行った。その後、復元作業、掲載遺物の選別、登録、写真撮影、実測、拓影、トレース、といった手順で行った。土器は完形に復元できたものが少ないため、口縁・底部について残存率を観察表に示した(完形を100%とし、5%刻みで表したもの)。

掲載土器は、遺構内出土は遺構帰属時期決定のため細片でも登録した。遺構外出土は種類・器種別に仕分けした上で、器形を推定できるものを優先して掲載した。底部外面に糸切り痕など痕跡がある場合は拓影を作成し、掲載した。

石器は、水洗・註記を行った後、担当調査員が全点を観察し、掲載した。

炭化物は、肉眼による炭化物同定用にサンプルを持ち帰り、同定した種類のみを記載した。

(3) 遺物写真撮影

遺物写真は、当センター写場にて写真技師岩間和幸が撮影を行った。撮影にはデジタルカメラ(EOS 1ds)を使用した。

(4) 整理経過

平成22年12月1日～平成23年2月28日の期間、2名体制で室内整理作業を行った。

3 広報活動

調査概報 『平成22年度発掘調査報告書』岩埋文第588集 2011年3月発行

Ⅳ 検出した遺構と遺物

1 全体の概要

検出した遺構は縄文時代、古代、古代以降の3時期に区分される。縄文時代は土坑1基・陥し穴状遺構14基、古代は竪穴住居跡8棟・土坑2基・溝跡1条、古代以降または時期不明は土坑1基・溝跡4条・柱穴状ピット33個である。

調査区は前述の通り、給食センターから野田中学校側を西区、野田村役場側を東区とする。

縄文時代の遺構は主に陥し穴状遺構で、いずれも溝状を呈する。西区1基、東区13基が検出されている。分布は全体から検出されているが、東区東側にやや多い傾向にある。

古代の竪穴住居跡はすべて東区から確認されている。規模は一辺5～6m前後でいずれも隅丸方形を呈している。残存状態は良好で深さが80cm前後のものがある。カマドは大半が北向きであり、5棟が調査区内から見つかっている。また、焼失住居が3棟認められる。遺物はやや少ないが、土師器が中心で刀子・釘などの鉄製品、琥珀などが出土している。遺構の時期は大半が平安時代と思われる。

本章では、時代・遺構別に記載し、出土遺物についても触れる。

2 縄文時代

(1) 土 坑

1号土坑

遺構(第8図、写真図版4)

西区中央のX=11934、Y=82846付近に位置する。Ⅳ層黄褐色土上面で、立木の根範囲にかかる略円形の黒褐色プランを確認した。

平面形は略円形、規模は残存値で開口部が140×(108)cm、底部が82×65cm。断面形は逆台形を呈し、開口部からやや南寄りに底部がある。元地形は北から南に向かって傾斜していたと考えられる。

堆積土は12層に細分される。1層は造成後の自然層、2層はグラウンド造成時に重機などによって圧力を受けた自然層、3～12層が遺構堆積土である。地山土は上位から褐色～黄褐色主体に鹿ノ子状の暗褐色斑がある層、中位は黄褐色のローム層、下位は黄褐色のハードローム層である。遺構堆積土は5・6・8・9層が壁面及び厨部の地山崩落土層、11層は北側からの地山流入土である。12層は底面に認められる溝跡の堆積土で、黒褐色を呈している。本遺構は崩落の状況から、フラスコ形の土坑であったことが推定される。遺構内から遺物は出土しなかった。

(2) 陥し穴状遺構

1号陥し穴状遺構

遺構(第8図、写真図版4)

西区中央部分のX=12186、Y=83272付近に位置する。Ⅰ層表土のグラウンド造成土を除去したⅤ層黄褐色粘土上面で、溝状の褐色プランとして検出した。南半はグラウンド造成時に大きく削平されている。

平面形は溝状、規模は開口部が2.56×0.58m、底部が2.62×0.11m、深さは82cm。長軸方位は、



第5図 遺構配置図(全体)



第6図 遺構配置図(西区)



第7図 遺構配置図(東区)

N48° Eである。北東側の斜面上部の底面は断面形がオーバーハングしている。

堆積土は5層に細分される。1～4層は遺構堆積土、5層は掘り過ぎて黄褐色ロームの地山土である。遺構堆積土は褐色土主体で、3層には壁面の地山崩落土などを含むにぶい黄褐色粘土質の流入土が混入している。最下層である4層以外は地山起源の堆積土で埋没しており、自然堆積と考えられる。出土遺物はない。

2号陥し穴状遺構

遺構（第8図、写真図版4）

東区ゴミステーション西側部分のX=12010、Y=83051付近に位置する。I層表土の畑耕作土を除去したV層黄褐色粘土上面で、溝状の暗褐色ブランとして検出した。北西側は調査区外である。

平面形は溝状、規模は開口部が(1.84)×0.54m、底部が(1.87)×0.17m、深さは92cm。長軸方位は、N27° Eである。南西側の底面は断面形がオーバーハングしている。

堆積土は7層に細分され、すべて遺構堆積土である。最下層の7層黒褐色土は初期堆積土、3・5層黄褐色粘土質土は壁面崩落土層、また全体に地山ブロックを混入している。出土遺物はない。

3号陥し穴状遺構

遺構（第9図、写真図版4）

東区ゴミステーション西側部分のX=12005、Y=83048付近に位置する。I層表土の畑耕作土を除去したV層黄褐色粘土上面で、調査区を縦断する旧排水管の攪乱底面にパイプの直下に沿う溝状の黄褐色ブランとして検出した。遺構上部の大部分は攪乱により破壊されている。

平面形は溝状、規模は残存する開口部が3.50×0.28m、底部が3.56×0.11m、深さは95cm。長軸方位は、N57° Eである。南西側の断面形がオーバーハングしている。

堆積土は単層である。黄褐色粘土質土で、地山小ブロックを混入する。上部は攪乱により不明である。出土遺物はない。

4号陥し穴状遺構

遺構（第8図、写真図版5）

東区筆界未定地東側部分のX=12075、Y=83134付近に位置する。I層表土の宅地造成土を除去したV層黄褐色粘土上面で、溝状の暗褐色ブランとして検出した。南東側は調査区外である。

平面形は溝状、規模は開口部が(2.20)×0.76m、底部が(2.26)×0.13m、深さは104cm。長軸方位は、N34° Wである。北西側の底面は断面形がオーバーハングしている。

堆積土は7層に細分される。1～5層は遺構堆積土、6・7層は地山土である。遺構堆積土は、4・5層は壁面の崩落土層、1～3層は暗褐色～褐色土主体である。出土遺物はない。

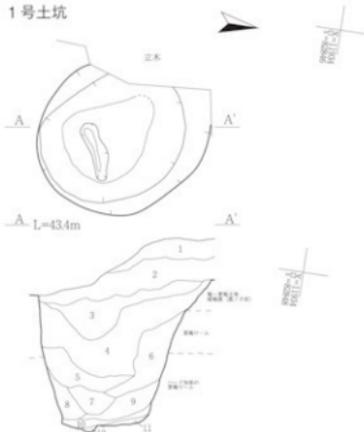
5号陥し穴状遺構

遺構（第9図、写真図版5）

東区筆界未定地東側部分のX=12077、Y=83137付近に位置する。I層表土の宅地造成土を除去したV層黄褐色粘土上面で、溝状の黒褐色ブランとして検出した。北西側は調査区外である。

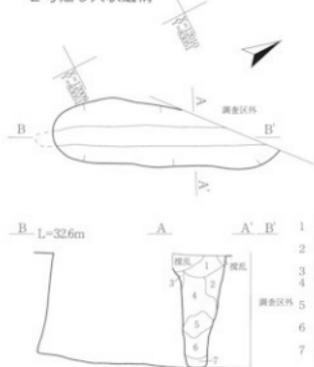
平面形は溝状、規模は開口部が(2.18)×0.94m、底部が(2.02)×0.17m、深さは1.32m。長軸方位は、N54° Wである。

1号土坑



- 10YR2/2.5暗褐色 シルト 粘性無・締まりやや弱 炭化物粒1%・地山小粒3~5%・黒色土粒1~2%混入。自然層。
- 10YR2/3暗褐色 シルト 粘性無・締まり密 2層と似るが、地山粒の量が多く(15~7%)、粒子が大きい。グラウンド造成時に重機等の圧力を受けたのか、非常に堅く締まる。
- 10YR3/2暗褐色 シルト 粘性無・締まりやや密 地山粒5~7%・炭化物粒1%混入。最終堆積層。道路側からの流入か。自然堆積層には見られない層。
- 10YR3/2.5暗褐色~暗褐色 シルト 粘性無・締まりやや弱 地山ブロック40%との混合土。炭化物粒1%混入。地山層を巻き込んだ流入土層。自然堆積か。自然堆積層には見られない層。
- 10YR4/6褐色 ローム 粘性無・締まり疎 黒褐色ブロック30%混入。フラスコの肩の崩落層。地山起源。
- 10YR5/6黄褐色 ローム 粘性無・締まりやや密 暗褐色ブロック15~20%混入。フラスコの肩の崩落層。地山の上部。
- 10YR3/4暗褐色 シルト 粘性無・締まり疎 地山細粒15~20%混入。自然堆積層には見られない層。
- 10YR5/6黄褐色 ローム 粘性やや弱・締まり疎 1~7層よりは粘性があるが、ダメージなる程ではない。全体的にモツモツしている。上部のやわらかいローム部分の層(肩)崩落土層。
- 10YR5/6黄褐色 ローム 粘性無・締まり密 ハード気味の下部のローム部分の層(肩)崩落土層。
- 10YR2/3暗褐色 シルト 粘性やや弱・締まり密 底面付近に薄く堆積する初期の粘土。堅く締まっている。
- 10YR5/6黄褐色 ローム 粘性無・締まり疎 道路側(北側)のみに見られる初期の流入土層。
- 10YR2/3暗褐色 シルト 粘性中~やや密 地山細粒10%混入。底面に見える層の直上。10層に類似する。

2号陥し穴状遺構

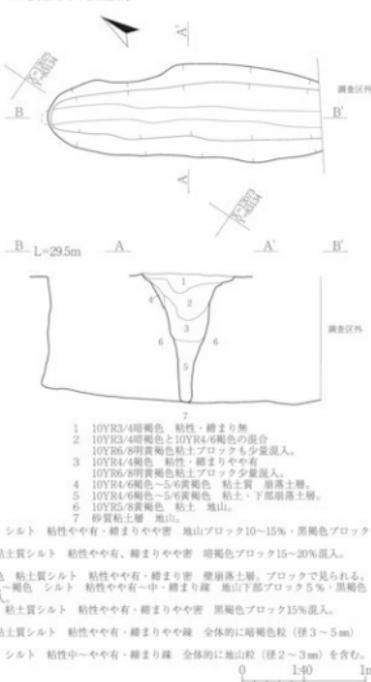


1号陥し穴状遺構



- 10YR4/6褐色 粘土質シルト 粘性やや弱・締まりやや疎 暗褐色ブロック30%混入。上部に粘土層が残存する。
 - 10YR4/4褐色 粘土質シルト 粘性やや弱・締まり疎 全体的に暗褐色粒を含む。
 - 10YR4/5.4褐色~土に多い黄褐色 粘土質シルト 粘性やや弱・締まり疎 非常にやわらかい。全体的に暗褐色粒(径2~3mm)を含む。地山流入土層。
 - 10YR2/5.3暗褐色~暗褐色 シルト 粘性やや弱・締まり疎 全体的に地山細粒(径1~2mm)を含む。初期堆積土層。
 - 10YR5/6黄褐色 ローム 粘性中~やや密 締まり密 異り過ぎ。地山層。
- ※自然堆積。最下層以外は暗褐色粒を含む地山起源の堆積土層で埋没している。

4号陥し穴状遺構



- 10YR3/4暗褐色 粘性・締まり無
- 10YR3/4暗褐色と10YR4/6褐色の混合
- 10YR6/6明黄褐色粘土ブロック少量混入。
- 10YR4/4褐色 粘性・締まりやや弱
- 10YR6/6明黄褐色粘土ブロック少量混入。
- 10YR4/6褐色~5/6黄褐色 粘土質 崩落土層。
- 10YR4/6褐色~5/6黄褐色 粘土・7層崩落土層。
- 10YR5/8黄褐色 粘土 地山。
- 砂質粘土層 地山。

- 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性やや弱・締まりやや密 地山ブロック10~15%・黒褐色ブロック20%混入。
- 10YR4/6褐色 粘土質シルト 粘性やや弱・締まりやや疎 暗褐色ブロック15~20%混入。地山流入土層。
- 10YR6/6明黄褐色 粘土質シルト 粘性やや弱・締まりやや密 崩落土層。ブロックで見られる。
- 10YR3/5.4暗褐色~褐色 シルト 粘性やや弱~中・締まり疎 地山下部ブロック5%・黒褐色ブロック3%混入。
- 10YR5/6黄褐色 粘土質シルト 粘性やや弱・締まりやや密 黒褐色ブロック15%混入。崩落土層。
- 10YR4/6褐色 粘土質シルト 粘性やや弱・締まりやや疎 全体的に暗褐色粒(径3~5mm)を含む。
- 10YR2/3暗褐色 シルト 粘性中~やや弱・締まり疎 全体的に地山粒(径2~3mm)を含む。初期堆積土層。

第8図 1号土坑、1・2・4号陥し穴状遺構

堆積土は6層に細分される。1～4層は遺構堆積土、5・6層は地山土である。遺構堆積土は、最下層の4層黄褐色粘土は壁面崩落土、1～3層は自然流入土である。出土遺物はない。

6号陥し穴状遺構

遺構（第10図、写真図版5）

東区東住宅前部分のX=12081、Y=83143付近に位置する。I層表土の宅地造成土を除去したV層黄褐色粘土上面で、溝状の暗褐色プランとして検出した。東側は調査区外である。

平面形は溝状、規模は開口部が(3.39)×0.7m、底部が(3.73)×0.15m、深さは1.06m。長軸方位は、N63°Eである。両端の北東・南西側の底面は断面形がオーバーハングしている。

堆積土は5層に細分される。1～3層は遺構堆積土、4・5層は地山土である。最下層の3層暗褐色粘土質と黄褐色粘土との混合土は壁面崩落土、1・2層は自然流入土である。出土遺物はない。

7号陥し穴状遺構

遺構（第9図、写真図版5）

東区筆界未定地東部分のX=12068、Y=83126付近に位置する。I層表土の宅地造成土を除去したV層黄褐色粘土上面で、調査区にかかる溝状の黒褐色プランとして検出した。南東側は調査区外である。

平面形は溝状、規模は開口部が(1.27)×0.72m、底部が95×22cm、深さは1.08m。長軸方位は、N73°Wである。

堆積土は6層に細分される。1層は旧排水管の攪乱土、2～4層は遺構堆積土、5・6層は地山土である。最下層の4層黄褐色粘土及び3層黄褐色粘土質土は地山の壁面崩落土、2層のみが自然流入土である。断面には表れていないが、最下層に黒褐色土が薄く堆積しており、初期堆積土と思われる。出土遺物はない。

8号陥し穴状遺構

遺構（第10図、写真図版6）

東区東畑地部分のX=12138、Y=83213付近に位置する。I層表土の畑地耕作土を除去したV層黄褐色粘土上面で、調査区にかかる溝状の黒褐色プランとして検出した。南東側は調査区外、調査区際は旧排水管による攪乱で破壊されている。

平面形は溝状、規模は開口部が(1.37)×(0.28)m、底部が1.24×0.13m、深さは85cm。長軸方位は、N72°Wである。調査時の不手際により、遺構上端を掘り過ぎてしまったため、上端の大半を欠いている。

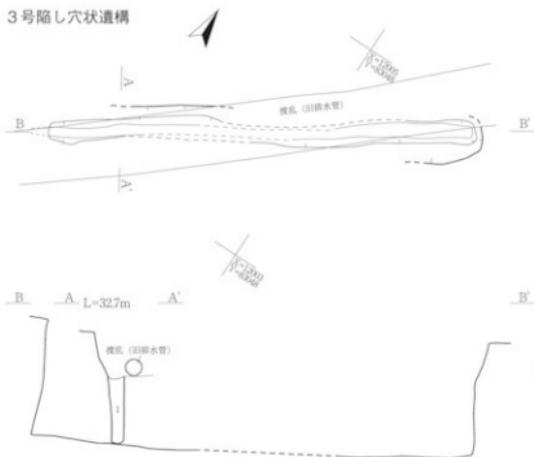
堆積土は4層に細分される。1～3層は遺構堆積土、4層は地山土である。遺構堆積土のうち、2層黄褐色粘土質土は地山の壁面崩落土、1・3層は自然流入土である。最下層の4層黄褐色粘土及び3層黄褐色粘土質土は地山の壁面崩落土、2層のみが自然流入土である。断面には表れていないが、最下層に黒褐色土が薄く堆積しており、初期堆積土と思われる。出土遺物はない。

9号陥し穴状遺構

遺構（第10図、写真図版6）

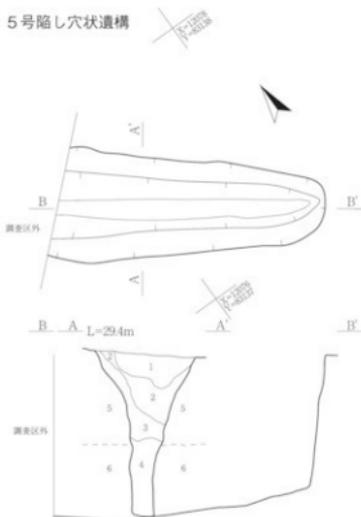
東区東畑地部分のX=12117、Y=83188付近に位置する。I層表土の畑地耕作土を除去したV層黄褐色粘土上面で、調査区にかかる溝状の褐色プランとして検出した。北西側を農業用パイプの攪乱、

3号陥し穴状遺構



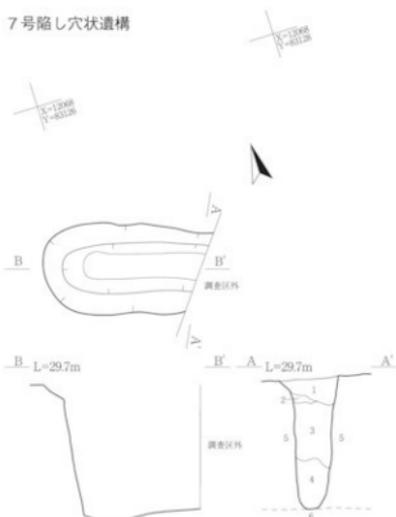
- 1 10YR5/6黄褐色 粘土質シルト 粘性やや有・
締まりやや強 地山下部小ブロック7~10%混入。全体的に黒褐色細粒 (径1~2mm) を含む。
※自然堆積。田排水管によって上部を破壊されているが、下部は全体的に残存している。

5号陥し穴状遺構



- 1 10YR2/2黒褐色 粘性・締まり無 黄褐色粘土粒やや混入。
2 10YR3/4暗褐色 10YR5/6黄褐色ブロック少量混入。
3 10YR4/4~6褐色 粘性・締まり無。
4 10YR5/8黄褐色 粘土 粘性有・締まり無 崩落土。
5 10YR5/6黄褐色 粘土 地山。
6 10YR4/4褐色 砂質粘土 地山。

7号陥し穴状遺構

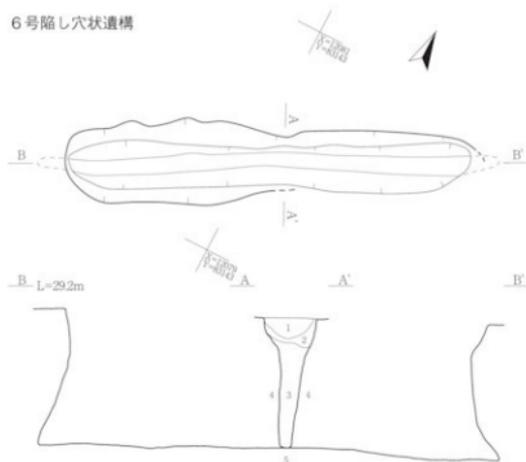


- 1 10YR2/2黒褐色 粘性・締まり無 埋瓦土 (田排水管)。
2 10YR3/4暗褐色 粘性・締まり無。
3 10YR5/6黄褐色 粘土質 粘性有・締まりやや有 地山崩落土。
4 10YR5/6~8黄褐色 粘土 粘性強・締まり有 地山崩落土。3層より粘性強い。
5 10YR6/9明黄褐色 粘土 地山。
6 10YR4/6褐色 砂質粘土 地山。

0 1:40 1m

第9図 3・5・7号陥し穴状遺構

6号陥し穴状遺構



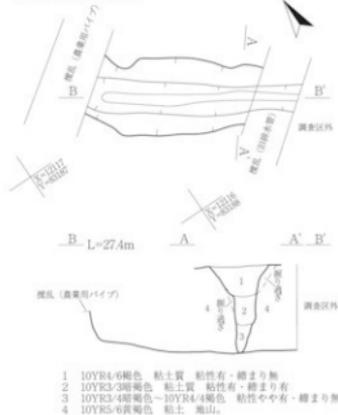
- 1 10YR3/4暗褐色と10YR2/3黒褐色の混合
- 2 10YR4/6褐色 粘土質 粘性やや有・粘まり無
- 3 10YR3/4暗褐色粘土質と10YR5/8黄褐色粘土の混合
粘性有・粘まり無 崩落土。
- 4 10YR5/6黄褐色 粘土 地山。
- 5 10YR4/6褐色 砂質粘土 地山。

8号陥し穴状遺構



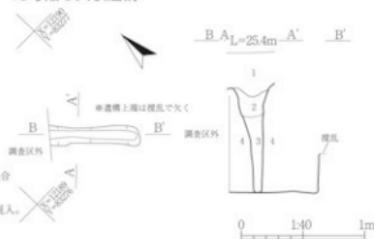
- 1 10YR3/4暗褐色と10YR5/8黄褐色粘土質ブロック
(径5cm) 少量の混合 粘性・粘まり無
- 2 10YR5/6黄褐色 粘土質 粘性やや有・粘まり無 地山崩落土。
- 3 10YR4/4褐色～3/4暗褐色 粘性・粘まり無。
- 4 10YR5/8黄褐色 粘土 地山。

9号陥し穴状遺構



- 1 10YR4/6褐色 粘土質 粘性有・粘まり無
- 2 10YR3/3暗褐色 粘土質 粘性有・粘まり有
- 3 10YR3/4暗褐色～10YR4/4褐色 粘性やや有・粘まり無
- 4 10YR5/6黄褐色 粘土 地山。

10号陥し穴状遺構



- 1 10YR2/3黒褐色・10YR6/6暗褐色粘土質の混合
現代の覆土。
- 2 10YR4/4～4/6褐色 粘性・粘まり無
- 3 10YR5/6黄褐色粘土 (径1cm) 2～3%混入。
- 4 10YR4/4褐色 粘性・粘まり無
- 4 10YR5/8黄褐色 粘土 地山。

第10図 6・8～10号陥し穴状遺構

南東側を旧排水管の掘削で破壊されている。さらに南東側は調査区外となる。

平面形は溝状、規模は開口部が(1.68)×(0.63)m、底部が(1.60)×0.1m、深さは70cm。長軸方位は、N56°Wである。

堆積土は4層に細分される。1～3層は遺構堆積土、4層は地山土である。遺構の一部を掘り過ぎている。遺構堆積土は暗褐色～褐色主体である。出土遺物はない。

10号陥し穴状遺構

遺構(第10図、写真図版6)

東区東端部分のX=12190、Y=83276付近に位置する。I層表土の宅地造成土及び掘乱土を除去したV層黄褐色粘土中で、調査区にかかる溝状の褐色プランとして検出した。北西側は調査区外で、遺構上端は掘削で破壊されている。

平面形は溝状、規模は開口部が(0.73)×(0.16)m、底部が(70)×8cm、深さは85cm。長軸方位は、N44°Wである。

堆積土は4層に細分される。1層は宅地造成土の表土、2・3層は遺構堆積土、4層は地山土である。遺構堆積土は褐色土主体で構成される。出土遺物はない。

11・12号陥し穴状遺構

遺構(第11図、写真図版6)

東区東端部分のX=12182、Y=83265付近に位置する。I層表土の畑地耕作土を除去したV層黄褐色粘土上面で、調査区にかかり交差する溝状の黒褐色プランとして検出した。両遺構はいずれも5号溝跡と重複しており、本遺構は旧期である。また、断面観察から11号が12号よりも新期となる。11号は12号が完全に埋没した後に構築されている。北西側は調査区外となり、11号の一部が調査区にかかっている。

平面形は両遺構とも溝状、11号の規模は、開口部が(3.64)×(0.94)m、底部が3.53×0.27m、深さは1.11m。長軸方位は、N81.5°Eである。12号の規模は、開口部が(1.78)×(0.23)m、底部が1.7×0.16m、深さが95cm。長軸方向はN74°Wである。12号の底部北西側はオーバーハングしている。

堆積土は11号が8層、12号が2層、地山が3層の計13層に細分される。11号の堆積土は、1・2層が宅地擁壁建築時の埋土(表土)及び掘乱土、3～8層が遺構堆積土である。このうち、4・5層は壁面崩落土など地山土で、これを挟んで上位は黒褐色土、下位は暗褐色土主体となる。12号の堆積土は、2層の遺構堆積土で構成され、暗褐色土主体である。いずれも黄褐色粘土の地山ブロックを混入する。地山土は、11層が基本層序V層黄褐色粘土、12層が基本層序VI層褐色砂質土、13層が基本層序VII層10～15cm大の亜角礫を多量に混入する褐色砂質土である。

遺物(第29図、写真図版24)

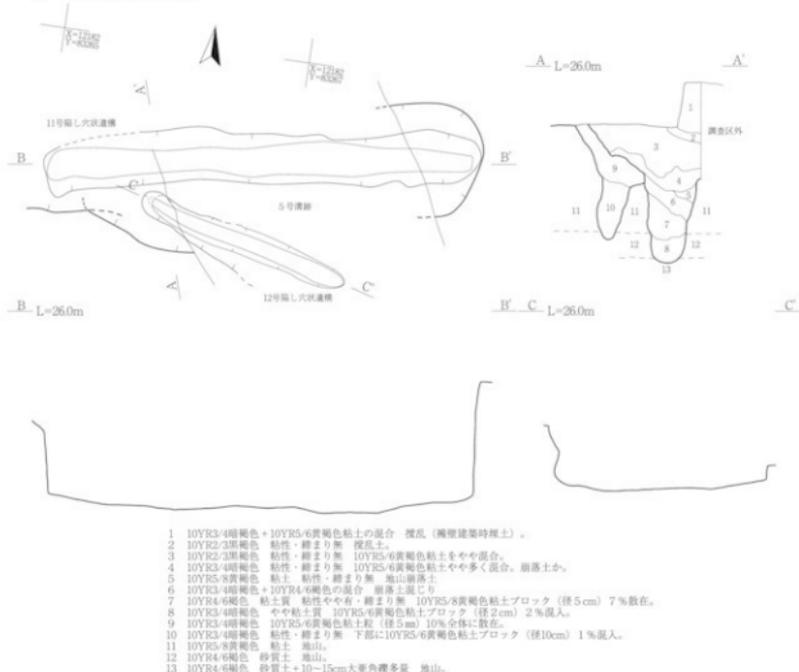
11号の北西側堆積土下位(8層中)から、44石鏃が1点出土した。長さ5cm弱の有茎石鏃で頁岩製、茎部に黒色粘着物が付着した装着痕が認められる。狩猟の際に放った矢がそのまま陥し穴堆積土中に混入した可能性がある。

13号陥し穴状遺構

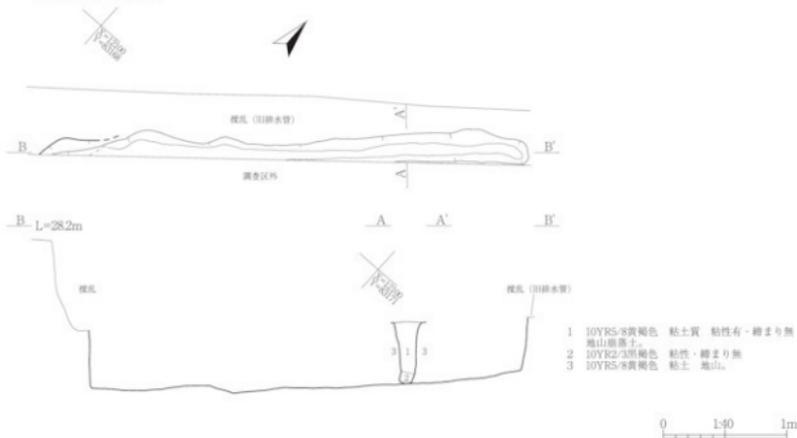
遺構(第11図、写真図版7)

東区東住宅前部分のX=12101、Y=83169付近に位置する。6号竪穴住居跡の精査のため、旧排水

11・12号陥し穴状遺構



13号陥し穴状遺構



第11図 11~13号陥し穴状遺構

管によって攪乱された部分の底面から、調査区境に沿う溝状の黄褐色プランとして検出した。6号竪穴住居跡・1号性格不明遺構と重複しているが、本遺構が旧期である。

平面形は溝状、規模は開口部が(3.87)×(0.26)m、底部が(3.48)×0.1m、深さは50cm。長軸方位は、N48°Eである。遺構上端は重複遺構及び攪乱によって破壊されている。

堆積土は3層に細分される。1・2層は遺構堆積土、3層は地山土である。遺構堆積土は、最下層の初期堆積土が黒褐色土であり、上位は地山の壁面崩落土層である。出土遺物はない。

14号陥し穴状遺構

遺構(第12図、写真図版7)

東区東住宅前部分のX=12148、Y=83226付近に位置する。8号竪穴住居跡の精査のため、旧排水管によって攪乱された部分を掘削したところ、西側の断面から確認した。8号竪穴住居跡と重複しているが、本遺構が旧期である。南東側は調査区を縦断する旧排水管の攪乱によって破壊されており、調査区外へと続く。

平面形は溝状、規模は開口部が(89)×(68)cm、底部が(84)×10cm、深さは1.14m。長軸方位は、N37°Wである。

堆積土は5層に細分される。1～3層は遺構堆積土、4・5層は地山土である。遺構堆積土は、最下層の3層黄褐色粘土質土が地山崩落土、1・2層は自然流入土である。出土遺物はない。

3 古 代

(1) 竪穴住居跡

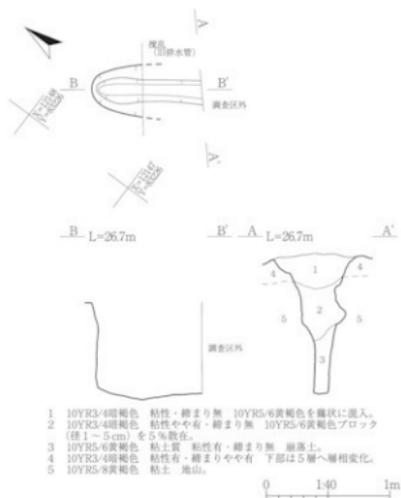
1号竪穴住居跡

遺構(第13・14図、写真図版8～10)

東区西ゴミステーション付近のX=11996、Y=83037付近に位置する。I層表土の畑耕作土を除去したV層上面で調査区南東に延びる方形の黒褐色プランとして検出した。1号溝跡・3号土坑と重複し、本遺構が旧期である。調査区を縦断している旧排水管の攪乱によって、遺構底面まで大きく破壊されている。

平面形は隅丸方形を呈していると見られ、規模は北壁(3.22)m、西壁(2.30)m、東・南壁は調査区外である。P1及びP2の位置から、南北壁が東西壁に比べてやや長い形状が想定される。壁高は北壁55cm、西壁56cmで東・南壁は不明である。壁は残存から、床近くはほぼ垂直であるが、中央より上部から急激に開く形状となる。

堆積土は10層に細分され、2・4層暗褐色土主体で形成される。2～4層は連続的に堆積した自然



第12図 14号陥し穴状遺構

流入土。3号土坑は2層までが被覆した後に作られた遺構である。その後、最終的な遺構被覆土である1層が堆積している。他の竪穴住居跡の堆積を観察すると、最終堆積土はかなり時間を経てから流入した可能性がある。5層は初期堆積土。6～9層はカマド関連の堆積土。6層はもともと地山粘土を貼り付けたカマド構築土と考えられ、天井部を構成していたものが崩落したものとと思われる。使用による被熱により、にぶい橙色に焼き締められており、堅くなっている。8・9層も芯材である礫の内外面に貼り付けられた粘土で、カマド構築土の一部である。カマド内部である8層は被熱により暗赤褐色に変化している。7層は4層やカマド煙道堆積土4層とも共通する自然流入土と考えられる。また、4層中には1～10cm大の黄褐色粘土ブロックが散在しており、土層根もしくは土壁など建築材の残骸と思われる。また、床面直上にはクリ材を中心とした炭化材（一部ナラ・ケヤキ）と焼土塊が確認されている。炭9は直径10cmほどの柱状を呈しており、建築部材の一部と見られる。このことから、4層は住居焼失直後に堆積した自然流入土と考えられる。

カマドは北壁中央に1基設置されている。煙道方位はN8°W。現代の擾乱によってカマドの主要な部分が破壊されている。袖の残存部分は住居構築後に作られたと見られ、地山である黄褐色粘土を芯材である礫に貼り付けて構築している。両袖は残存部からはほぼ平行に延びており、袖の先端付近が焚き口を成している。この箇所底面には(28×7)cm、大半が調査区外のため形状は不明であるが焼成面が形成されている。焼成面の燃焼による影響は深さ5cmにまで及び、赤褐色に焼成されている。煙道は全長で[1.40]m程度あると思われ、煙出し付近まで徐々に高くなる構造をしている。煙道部の側面には20～30cm大の扁平礫が設置されており、壁との間にはにぶい黄褐色粘土が貼り付けられている。このことから、煙道は掘り込み式であった可能性がある。東側の礫2個は廃絶後に抜き取られている。礫は内側も暗褐色～褐色の構築土が貼り付けられているが、粘土質ではないため、煙量の調整に貼り付けられた可能性もある。カマド堆積土中から天井部を構築していたと見られる粘土片が認められた。粘土片は厚さ5cm程の板状を呈しており、内側に円形の孔が空けられている。推定だが、壊れやすい天井部分の一部は取り外しが出来る構造を成していたのかもしれない。

床面にはピット2基が作られている。北西隅に40×28cmのP1、西壁際に(36×25)cmのP2があり、P1は主柱穴の可能性もある。その他は調査区外のため不明である。

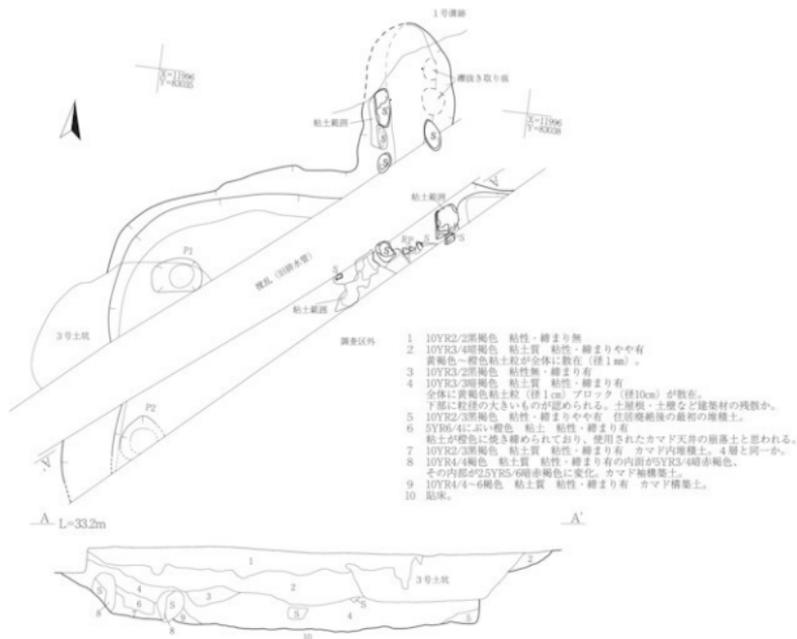
遺物（第27図、写真図版23）

堆積土下位やカマド周辺を中心に土師器片60点（677g）、金属製品3点、琥珀片1点が出土している。土師器の内訳は、堆積土が9点（87g）、堆積土下位が18点（237g）、カマド燃焼部直上が9点（128g）、カマド周辺が11点（57g）などである。このうち、1～4土師器、5～7金属製品、46琥珀の計8点を掲載した。出土した土師器片の大半が甕の体部破片である。甕はいずれも非ロクロ成形と思われ、輪轆痕が観察される。大抵の場合、外面に縦穴ケズリ、内面にハケメ調整が施されるが、1のように外面にもハケメがされる場合もある。2・4は体部の器形が膨らむ形状をしており、球胴形を呈すると見られる。金属製品はいずれも鉄素材で、5は刀子、6は刀子状の鉄製品、7は角釘である。琥珀片はカマド堆積土下位から出土しており、0.6gで特に調整は見られない。着火剤として用いられた可能性もある。坏が出土しておらず、時期決定の根拠に乏しいが、平安時代に属すると思われる。

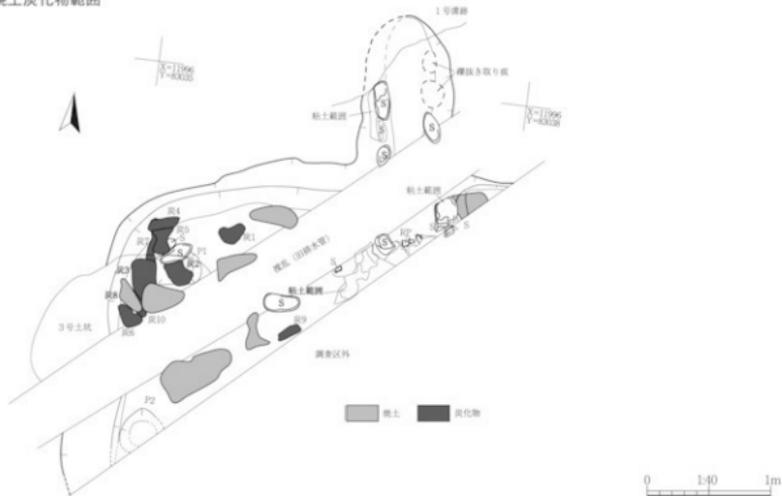
2号竪穴住居跡

遺構（第15・16図、写真図版11・12）

東区西宅地庭部分のX=11990、Y=83028付近に位置する。I層表土の畑耕作土及び住宅盛土を除

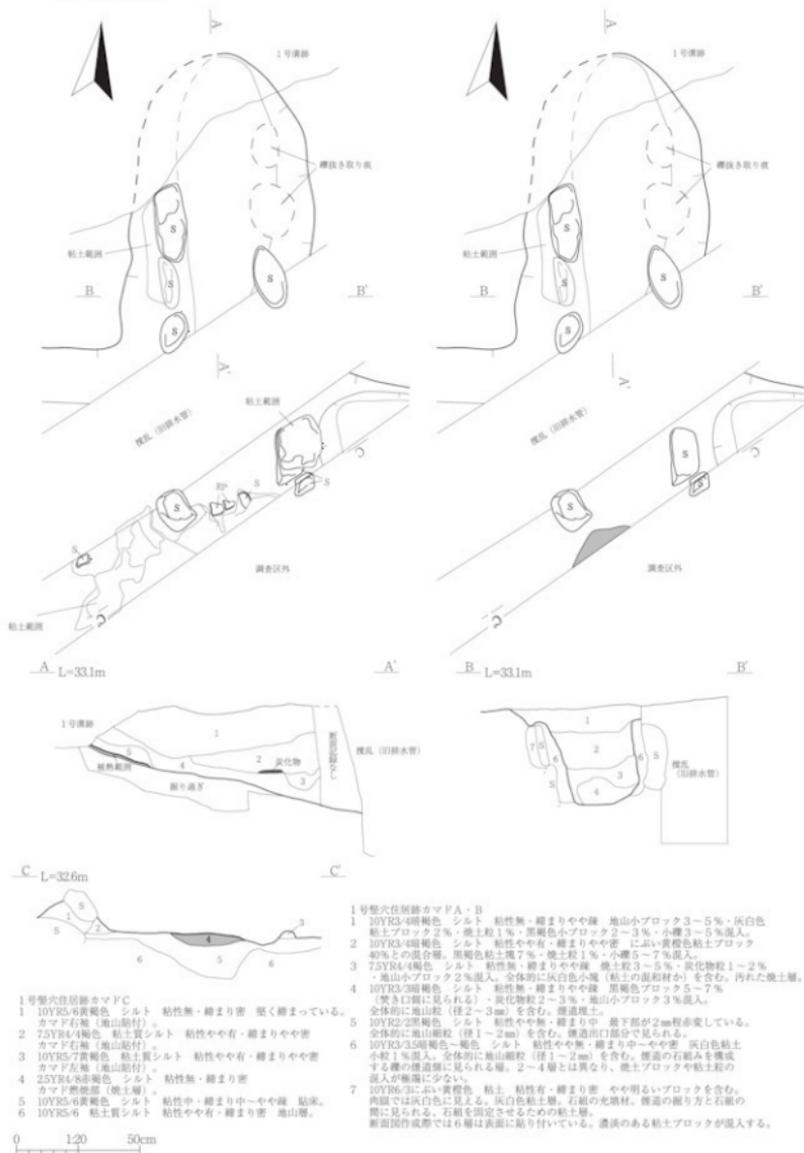


焼土炭化物範囲



第13図 1号竪穴住居跡 (1)

1号竪穴住居跡カマド



第14図 1号竪穴住居跡(2)

去したV層上面で調査区南に延びる方形の黒褐色プランとして検出した。1号溝跡と重複し、本遺構が旧期である。調査区を縦断している旧排水管の攪乱・カマド直上に設置された住宅コンクリート擁壁・浄化槽パイプ管・住宅下水道管によって、著しく破壊されている。

平面形は隅丸方形を呈していると考えられ、規模は北壁5.05m、東壁(0.52)m、西壁は攪乱により消失、南壁は調査区外である。全体の規模は不明である。壁高は北壁80cm、東壁56cmで西・南壁は不明である。壁は外傾しながら急に立ち上がる。

堆積土は16層に細分される。1～4層が攪乱及び盛土など表土層、5～12層が遺構堆積土、13～16層が地山である。住宅は元畑地であった場所に1～3層の盛土により整地を行い、周囲をコンクリート擁壁で囲っている。4層は整地前の畑耕作土と思われる。遺構堆積土は黒褐色土主体で構成され、8層は壁面崩落土。10・11層はP1堆積土。12層は住居掘り方を均して平坦にした貼床。床面はやや硬化しているが、内部は軟質である。13～16層は基本層序の地山で、13層は漸移層、以下はローム質となる。

カマドは北壁中央に1基設置されている。煙道方位はN20°W。カマド直上にちょうど住宅コンクリート擁壁と浄化槽パイプ管が設置されており、工事掘削の影響で上部は破壊されている。カマドは多量の扁平礫を石組みした上に粘土を貼り付けて構築していたと考えられる。袖の芯材とした礫は貼床を敷設する際に同時に作られたと思われ、掘り方は確認できなかった。礫は長さ50cm程あり、約半分を埋設しているためかなり頑丈な作りとなっている(S14・18など)。芯材は左右袖に幅20～25cmの礫を3～4個配置しており、礫の上部が揃うように設置されている。カマド内部には天井を構成していたと考えられる20～30cm大の扁平礫が崩れるように覆っていた。また、最も煙道入口側には62×22×8cmの扁平礫(S4)が袖礫(S16・20)を支えに蓋をするように設置されていた。この礫は元位置を保っており、カマドから煙道入口の天井を支えるものであると考えられる。両袖は煙道入口からは平行に延びており、袖の先端付近が焚き口を成している。この箇所底面には(53×44)cm、一部が調査区外であるが不整形の焼成面が形成されている。焼成面の燃焼による影響は深さ5cmにまで及び、赤褐色に焼成されている。煙道は全長1.74mで、煙出し部までは水平を保ち、立ち上がる直前にやや窪みがある構造をしている。先端の直径は51×44cmの円形を呈し、煙道からは外傾しながら急に立ち上がる。煙道は土匠により、天井構成土の14層と地山である20層が落ち込んでいるが、本来は削り貫き式で構築されていると考えられる。天井を構成していた14層の煙道～煙出し孔に至る外面には被熱痕と炭化物が付着しており、使用による痕跡と考えられる。天井石(S4)の上部17層も使用による被熱層である。

床面にはピット1基が作られている。P1はカマド左側に作られており、規模は56×46cmの不整形円形、深さは17cmである。位置及び堆積からは柱穴とは考えにくく、性格は不明である。

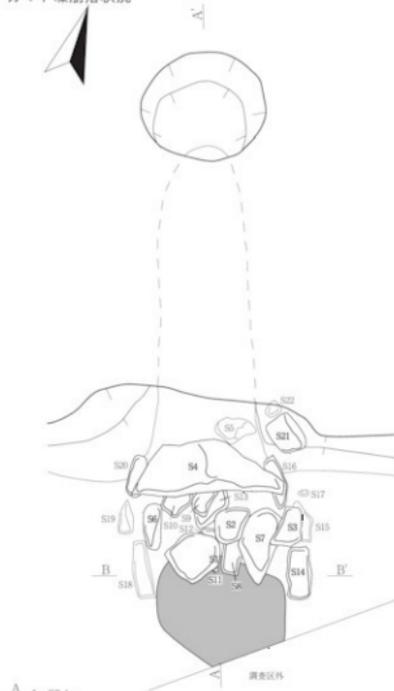
遺物 (第27図、写真図版23)

堆積土を中心に土師器片9点(26g)、金属製品1点が出土している。土師器の内訳は、堆積土が5点(20g)、カマド堆積土が4点(6g)である。細片が中心であるが、8～10土師器、11金属製品の4点を掲載した。8・9はロクロを使用した坏で、内面黒色処理が施されており、ミガキ調整がなされている。10もロクロ成形と思われる甕で、外面は縦位ケズリ、内面は横位ナデが見られる。11は刀金具と思われる。出土した土師器坏から、平安時代に属すると考えられる。

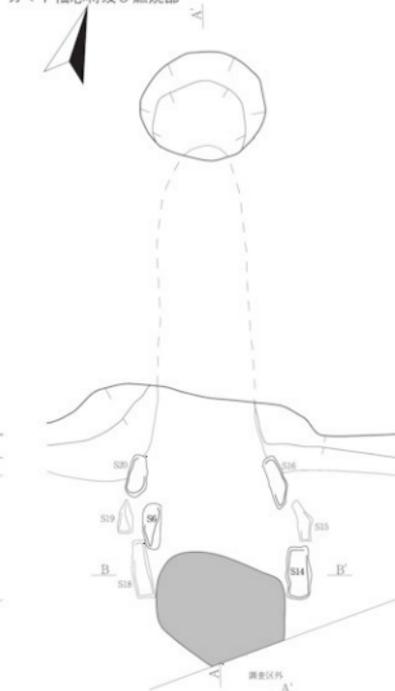
3号竪穴住居跡

遺構 (第17図、写真図版13)

カマド礫崩落状況



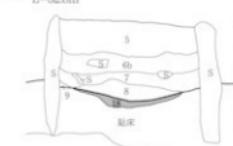
カマド袖芯材及び燃焼部



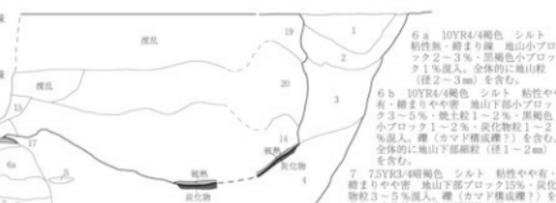
A L=33.4m

- 1 10YR2/3暗褐色 シルト 粘性無・締まり疎
全体的に地山粒 (径2~3mm) を含む。
- 2 10YR3/3.5暗褐色 シルト 粘性無・締まり疎
地山ブロック40%との混合土層。全体的に
地山粒を含む。
- 3 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性無・締まり疎
全体的に地山粒 (径1mm) を含む。
- 4 10YR2/2.5暗褐色 シルト 粘性無・締まり疎
全体的に地山粒 (径1mm) を含む。
3層よりは明らかに薄い。埋道内の堆積土。
- 5 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性中~やや有
・締まり中~やや有 地山粒2~3%・炭化
物粒1~2%混入。全体的に地山粒 (径
1~2mm) を含む。

B L=32.8m



- 17 5YR4/8赤褐色 シルト 粘性中・締まり中~やや有 靱熟層。
- 18 5YR4/3赤褐色 シルト 粘性中・締まり中~やや有 上面は火を受けてガタガタに硬く締まっている。カマド燃焼部 (焼土層)。
- 19 10YR3/3.5暗褐色 シルト 粘性やや有・締まり中~やや有 全体的に地山粒を含む。
- 20 10YR3/4暗褐色 シルト 粘性中~やや有・締まり疎 地山粒 (径3~5mm) 3%・地山ブロック20%・黒褐色ブロック10%混入。



- 6 7.5YR4/4暗褐色 粘土質シルト 粘性有・締まり中~やや有 焼土ブロック3~5%混入。全体的にのりとして
いる。被燃部 (カマド燃焼部) の直上に堆積している。
- 7 7.5YR3/4暗褐色 シルト 粘性中~やや有・
締まり中~やや有 地山下部ブロック15%・炭化
物粒3~5%混入。礫 (カマド構造礫?) を含む。
全体的に地山下部細粒 (径1~2mm)
を含む。
- 8 7.5YR4/4暗褐色 粘土質シルト 粘性有・締まり中~やや有 焼土ブロック3~5%混入。全体的にのりとして
いる。被燃部 (カマド燃焼部) の直上に堆積している。
- 9 10YR4/4暗褐色 シルト 粘性やや有・締まり中 地山小ブロック2~3%・焼土粒2~3%
・炭化物粒1~2%混入。
- 10 10YR3/4暗褐色 シルト 粘性無・締まり中 炭化物粒1%・焼土粒2~3%・地山小ブロック2~3%混入。
全体的に地山粒 (径2~3mm) を含む。
- 11 2.5Y7/6明黄褐色 粘土 粘性有・締まり密 灰白色粘土粒2%混入。ブロック状に見られる。
- 12 5YR4/8赤褐色 粘土質シルト 粘性中・締まり中~やや有 上部 (外側) は明黄褐色を呈する。
- 13 炭化物層。 焼土小ブロック2~3%・暗褐色ブロック20%・地山小ブロック2~3%混入。
- 14 10YR5/6黄褐色 シルト 粘性中~やや有・締まり中~やや有 暗褐色ブロック5%混入。
- 15 灰土層 (埋道前後部分) の埋道内にはヌスガ付着し、その内面は結核して凸出している。埋道の天井構成土層。
- 16 10YR3/4暗褐色 シルト 粘性中・締まり密 褐色ブロック15%混入。20層と似ているが締まっている。
- 17 5YR4/4暗褐色 シルト 粘性無・締まり密 堅く締まっている。地山ブロック (14層と同じもの) を含む。
9号を構成する礫 (灰土層?) の周辺にある火を受けて硬化した地山粒部の堆積層。
やや赤みや、天井部の崩落土層が。

第16図 2号竪穴住居跡 (2)

筆界未定地西のX=12016、Y=83061付近に位置する。1層表土の砂利など宅地造成土、2層盛土層を除去したV層上面で調査区南に延びる方形の暗褐色プランとして検出した。P8柱穴状ビットと重複し、本遺構が旧期である。調査区を縦断している旧排水管の擾乱によって、遺構底面まで大きく破壊されている。

平面形は隅丸方形を呈していると考えられ、規模は北壁(3.2)m、西壁(1.62)m、東・南壁は調査区外である。隅部分は大きく丸みを帯びる形状となっている。壁高は北壁66cm、西壁64cmで東・南壁は不明である。壁は外傾しながら急に立ち上がる。

堆積土は23層に細分される。1・2層は表土・盛土層、3・4層は擾乱、5～14層は遺構堆積土、15～23層はカマド堆積土で形成される。1・2層は現代の堆積土。3層は遺構北側にある住宅の排水管を設置した際の擾乱。4層は重複するP8柱穴状ビット堆積土。遺構堆積土は黒褐色～暗褐色土主体で、地山起源土を中央部の6層や13層自然流入土を含む。カマド堆積土は、18層がカマド天井部の崩落土、19層はカマド内堆積土でカマド煙道3層と共通する自然流入土と思われる。21・22層は袖構築土及び崩落土。23層はカマド袖部内面など燃焼部周辺の焼土層である。床面には貼床は成されておらず、黄褐色粘土の地山土で構成される。

カマドは北壁中央に1基設置されている。煙道方位はN14°W。現代の擾乱によってカマドの主要な部分が破壊されている。袖の残存部分は住居構築時からの作り出しであり、地山の黄褐色粘土で構築されている。両袖は壁からほぼ平行に延びていたと考えられるが、擾乱により不明である。残存部からは全体にやや東に寄っている。先端付近には焚き口があり、この箇所の底面には(40×16)cmの焼成面が形成されている。焼成面の燃焼による影響は深さ4cm程度で、中心部は明赤褐色、周囲が赤褐色に焼成されている。煙道は全長で[1.30]m前後あると思われるが、擾乱により不明である。煙道は床面よりも高い位置にあり、住居内部に向かって約10°傾斜して作られている。焼土ブロックや炭化物の混入が少なく、被痕跡がないことと形状からは煙道とするには否定的であるが、1号竪穴住居跡にも同じ傾角が見られることから可能性が高い。

床面施設は調査範囲からは確認できなかった。

遺物(第27図、写真図版23)

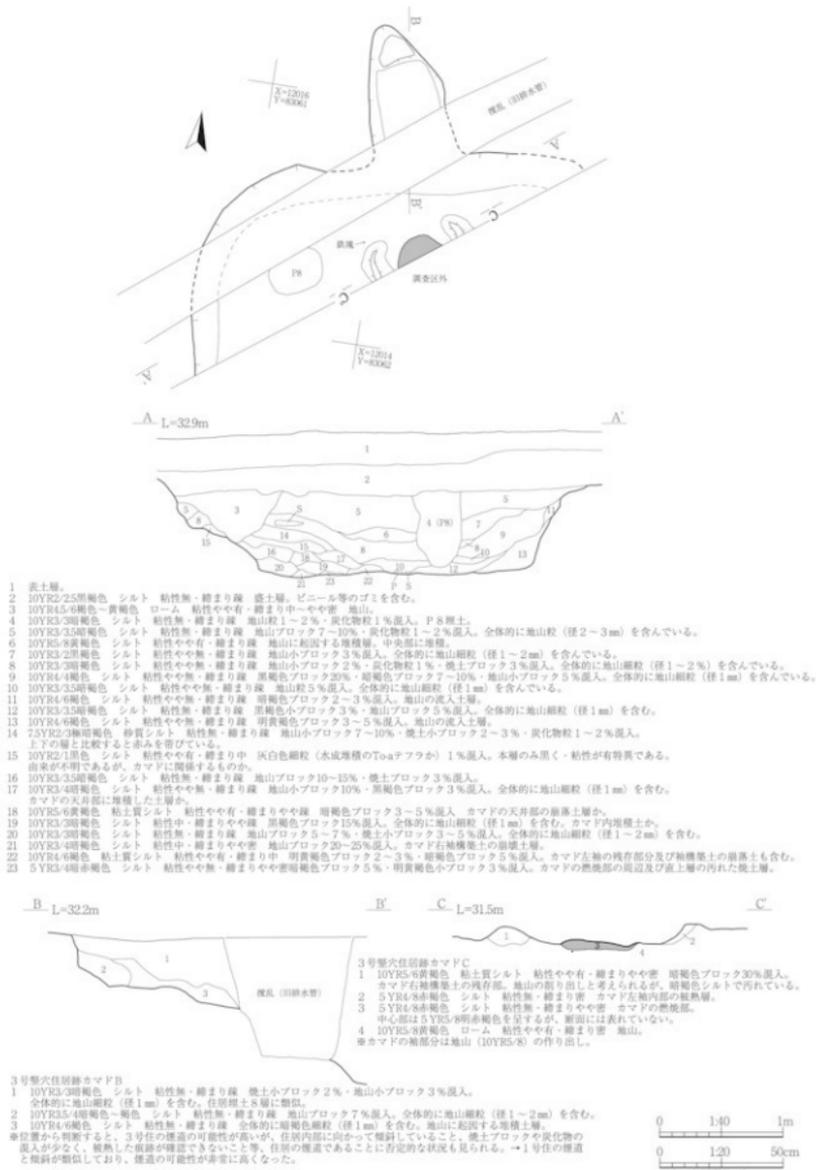
堆積土を中心に土師器片86点(1,260g)、鉄塊1点が出土している。土師器の内訳は、堆積土が51点(642g)、床直上が15点(281g)、カマド堆積土が7点(122g)などである。このうち、12～22土師器、23鉄塊の計12点を掲載した。出土した土師器片の大半が甕の体部破片である。甕はロクロ成形、非ロクロ成形と思われるものが混在する。15～17は非ロクロ成形の甕で、底面に木炭痕、ナデ調整が認められる。16・17は外面縦位ケズリ・内面ハケメ、15は外面ハケメ・内面ナデである。12・13はロクロ成形の坏で、内面黒色処理、ミガキ調整が施される。13底部には回転糸切り痕が認められる。14～21はロクロ・非ロクロの判断がつかない甕で、ロクロ成形と思われるものもある。18・20は外面ハケメ・内面ナデ、19・21は外面縦位ケズリ・内面ナデである。18は小型。22は非ロクロ成形の甕で、外面ケズリ・内面指痕が認められる。23は鉄塊で86.1g、床面から出土した。

ロクロ成形の坏が出土していることから、平安時代に属すると考えられる。

4号竪穴住居跡

遺構(第18図、写真図版8～10)

東区西ゴミステーション東側付近のX=12002、Y=83042付近に位置する。I層表土の畑耕作土を除去したV層上面で調査区北西に延びる方形の褐色プランとして検出した。現代の円形の擾乱と重複



第17図 3号竈穴住居跡

し、本遺構が旧期である。

平面形は隅丸方形を呈していると見られ、規模は南壁(1.06)m、東壁(0.73)m、北・西壁は調査区外である。調査範囲が少ないため、全体の形状は不明である。壁高は南壁45cm、西壁46cmで北・西壁は不明である。壁は外傾しながら急に立ち上がる形状である。

堆積土は10層に細分される。1層は表土の畑耕作土、2・3層は現代の攪乱、4～8層が遺構堆積土、9・10層は地山である。遺構堆積土は褐色土主体で構成され、4～6層は9層の褐色粘土質地山土に起因する堆積土である。8層黒褐色粘土質土は住居廃絶後の初期堆積土、7層はそれ以後の壁面崩落土である。床面は平坦で貼床は構築されておらず、堅靱な地山土で形成される。カマド及び床面施設は調査区内には確認されなかった。

遺物(第28図、写真図版24)

堆積土から出土した土師器片1点(3g)と4号住付近の表土層から出土した土師器片2点(7g)の計3点を掲載した。いずれも堯の体部破片で、24が外面ナデ・内面ハケメ調整、25・26が外面ケズリ・内面ハケメ調整である。成形方法は確認できなかった。時期は不明である。

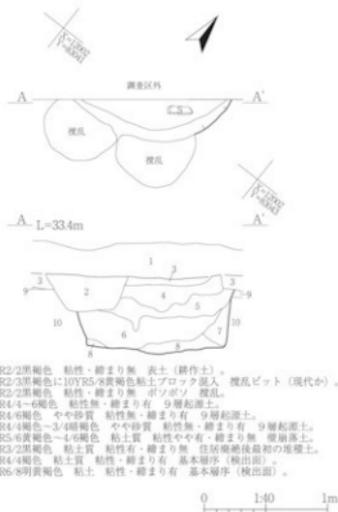
5号竪穴住居跡

遺構(第19・20図、写真図版15・16)

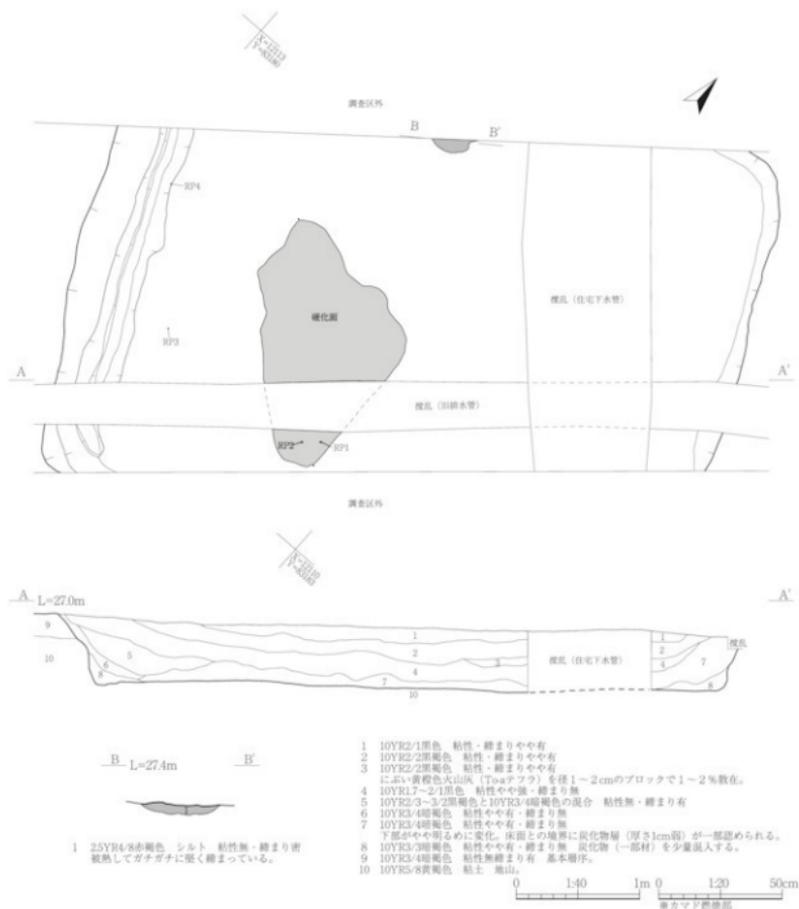
東区東住宅前部分のX=12113、Y=83180付近に位置する。I層表土の宅地造成土を除去したV層上面で調査区北及び南に延びる方形の黒褐色プランとして検出した。調査区を縦断している旧排水管及び住宅下水道管の攪乱によって、遺構底面まで大きく破壊されている。

平面形は隅丸方形を呈していると見られ、規模は東壁(2.85)m、西壁(2.60)m、北・南壁は調査区外である。南北壁が東西壁に比べてやや長い長方形の形状と考えられる。壁高は東壁(33)cm、西壁54cmで北・南壁は不明である。壁は残存から、床近くはほぼ垂直であるが、中央より上部から急に開く形状となる。

堆積土は10層に細分され、レンズ状に堆積している。1～8層は遺構堆積土、9・10層は地山土である。上位の1～5層は黒色～黒褐色主体で、下位の6～8層は暗褐色主体で構成される。3層にはばい黄褐色火山灰が径1～2cmのブロックで1～2%散在しており、テフラ同定分析を実施したところ、十和田火山灰(To-aテフラ)に同定された(V-2参照)。7層と床面との境界に厚さ約1cmの炭化物層が形成されており、一部は材の状態を確認される。また、床面直上にはクリ・エンジュ(ケヤキ)材を中心とした炭化材と焼土塊が確認されている。炭化材は中央部に少なく、壁際に多く出土する傾向にある。9層は基本層序のIV層褐色地山土で、遺構掘り込み面となる。床面近くに形成された炭化物層と床面の炭化材・焼土出土状況から焼失した可能性がある。



第18図 4号竪穴住居跡

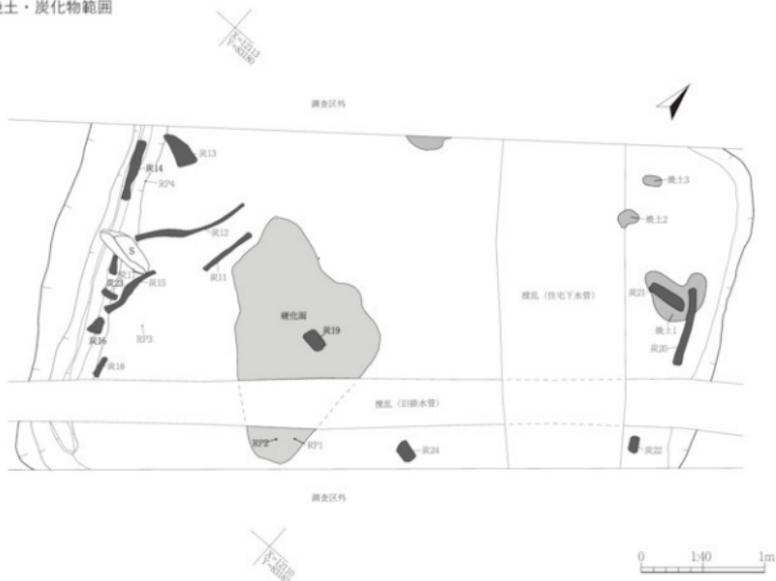


第19図 5号竪穴住居跡(1)

カマドは北壁中央付近に設置されていると考えられるが、調査範囲内からは燃焼部の一部のみが検出された。燃焼部の規模は、(51×11)cmの不整形形と思われる。燃焼による影響は深さ4cm、赤褐色に変色しており、表面は被熱の影響によって堅く締まっている。

床面の中央やや南西寄りには硬化面が形成されている。規模は2.02×1.02mの不整形形で、他の箇所よりも堅く締まっている。床面には掘り方を平坦にするための貼床が部分的に確認され、東側よりも西側が深くなる傾向にある。また、西壁際には浅い壁溝が設けられており、幅28~35cm、深さは4~10cm弱ある。東壁には存在せず、南北壁は不明。

焼土・炭化物範囲



第20図 5号竪穴住居跡(2)

遺物(第28図、写真図版23)

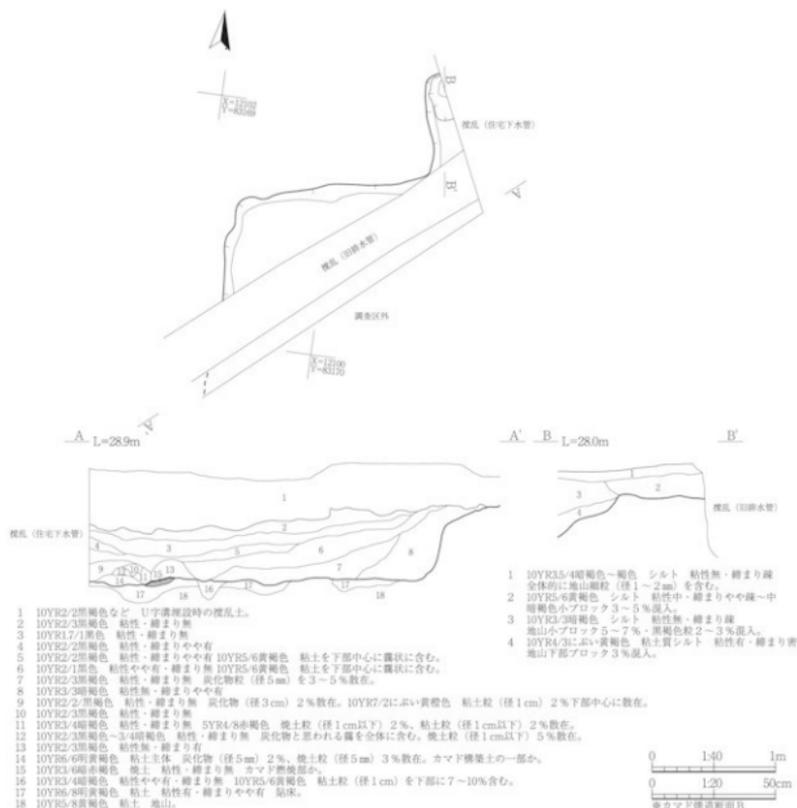
堆積土下位～床面を中心に土師器片88点(1,974g)が出土している、内訳は、堆積土が42点(689g)、床直上が1点(16g)、床面が36点(1,120g)などである。出土した土師器片の大半が甕の体部破片である。このうち、27～36土師器の坏3点、甕7点を掲載した。いずれも非ロクロ成形である。27～29は外面に段を持つ坏で、内面に黒色処理・ミガキ調整が施されている。外面は27がミガキ調整、28は段より上がミガキ、下がハケメ調整、29はナデ調整がなされる。段は体部上位に設けられている。30～36は甕で、30・35・36は内外面ハケメ調整である。また、31の底部にはハケメ調整、35には木葉痕が残る。すべて奈良時代に属すると考えられる。

6号竪穴住居跡

遺構(第21図、写真図版17)

東区東住宅前部分のX=12102、Y=83169付近に位置する。I層表土のU字コンクリート側溝埋設時の攪乱土及び宅地造成土を除去したV層黄褐色粘土上面で調査区南東に延びる方形の黒褐色プランとして検出した。13号陥し穴状遺構・1号性格不明遺構と重複しているが、本遺構が新期である。調査区を縦断している旧排水管及び住宅下水道管の攪乱によって、遺構底面まで大きく破壊されている。

平面形は隅丸方形を呈していると考えられ、規模は北壁(1.88)m、西壁(1.6)m、東・南壁は調査区外である。全体の形状は不明である。壁高は北壁12cm、西壁62cmで東・南壁は不明である。壁は残存から、床近くはほぼ垂直であるが、中央より上部から急に開く形状となる。



第21図 6号竈穴住居跡

堆積土は18層に細分される。1層は擾乱を含む表土、2~8層は遺構堆積土、9~15層はカマド堆積土、16層は床面ピットか堆積土、17層は粘床、18層は地山土である。遺構堆積土は黒褐色土主体に構成され、最下部の7層中には炭化物粒を3~5%含む。カマド堆積土は14層の明黄褐色粘土が袖構築土などカマド崩落土と思われる。カマドの主要な部分は擾乱により破壊されているため判然としない。15層の暗赤褐色土はカマド燃焼部と考えられ、深さ4cmまで影響を受けている。

カマドは北壁中央に1基設置されていると考えられる。煙道方位は $N8^{\circ}W$ 。前述の通り、現代の擾乱によってカマドの主要な部分が破壊されている。袖の残存部分から、カマドは住居構築後に作られたと見られ、黄褐色粘土の地山土で構築されたと見られる。煙道は全長で96cm程度と思われ、煙出し部分の底面がピット状に深くなる構造をしている。残存部からは掘り込み式であった可能性がある。東側の竈2個は廃絶後に抜き取られている。竈は内側も暗褐色~褐色の構築土が貼り付けられている。

床面施設についてはセクション16層にピットと思われる掘り込みが1箇所確認される以外は、擾乱の影響もあり不明である。遺構内から遺物は出土しなかった。

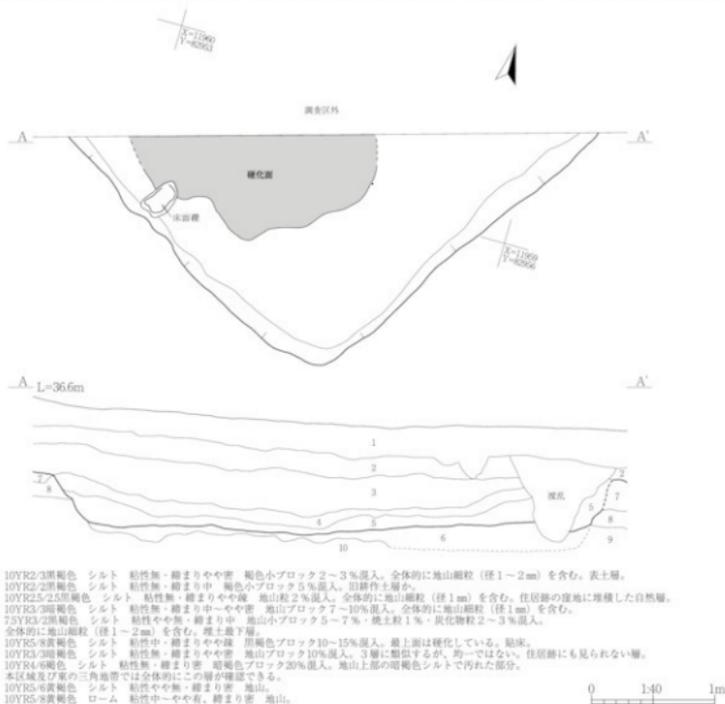
7号竪穴住居跡

遺構（第22図、写真図版18）

東区西端部分のX=11960、Y=82954付近に位置する。V層上面で調査区北西に延びる中央が暗褐色で周囲が黒褐色の方形プランとして検出した。当初、V層を検出面としていたため、遺構上部の7・8層を掘り込んでしまい、9層になってから遺構と認識した。そのため、上層は調査により破壊している。

平面形は隅丸方形を呈していると見られ、規模は東壁(3.02)m、南壁(2.82)m、北・西壁は調査区外である。形状はほぼ方形と思われるが不明である。壁高は東壁43cm、南壁36cmで北・西壁は不明である。壁は残存から、外傾しながら緩やかに立ち上がる形状である。

堆積土は10層に細分される。1層は表土層、2層は旧耕作土層、3層は住居の窪地に堆積した自然層で遺構堆積土上部を占める層、4・5層は遺構堆積土、6層は貼床、7～10層は地山土である。遺構堆積土である3～5層は3層と4・5層は堆積速度が異なり、下位の4・5層は住居廃絶後、早い



第22図 7号竪穴住居跡

段階に堆積したと見られる。対して、3層は遺構西側からの自然流入が緩やかに進んだため、堆積速度はかなり遅く、2層の旧耕作土が堆積するまで窪地の状態であった可能性が高い。昭和40年に行われた調査の際には、このような窪地が多数確認されていることから、本遺構もその一つであると考えられる。これは黒ボク土の発達が遅いと海からの東風によるものなどから堆積速度が著しく減じられたためと考えられる。6層の貼床は住居掘り方の東側が西側よりも低くなったことから、平坦化するために東側に多く敷設されている。また、中央から南寄りに硬化面が形成されており、主な生活空間があったことを示唆している。

カマドは調査範囲内からは検出されなかったが、他遺構からカマドは北壁に設置される傾向にある。

床面施設は確認されなかった。主柱穴と想定されるピットも認められなかったことから、掘立式の上屋ではなく、床面に扁平礎などを設置して柱を立てる構造であった可能性がある。

遺物（第28図、写真図版24）

堆積土から土師器片9点（43g）が出土した。すべて非口ロク成形の甕の体部破片である。このうち、37～39の計3点を掲載した。いずれも外面ケズリ・内面ナデ調整が施されている。同一個体の可能性もある。土師器坏が出土していないため、根拠が弱いが平安時代に属すると考えられる。

8号竪穴住居跡

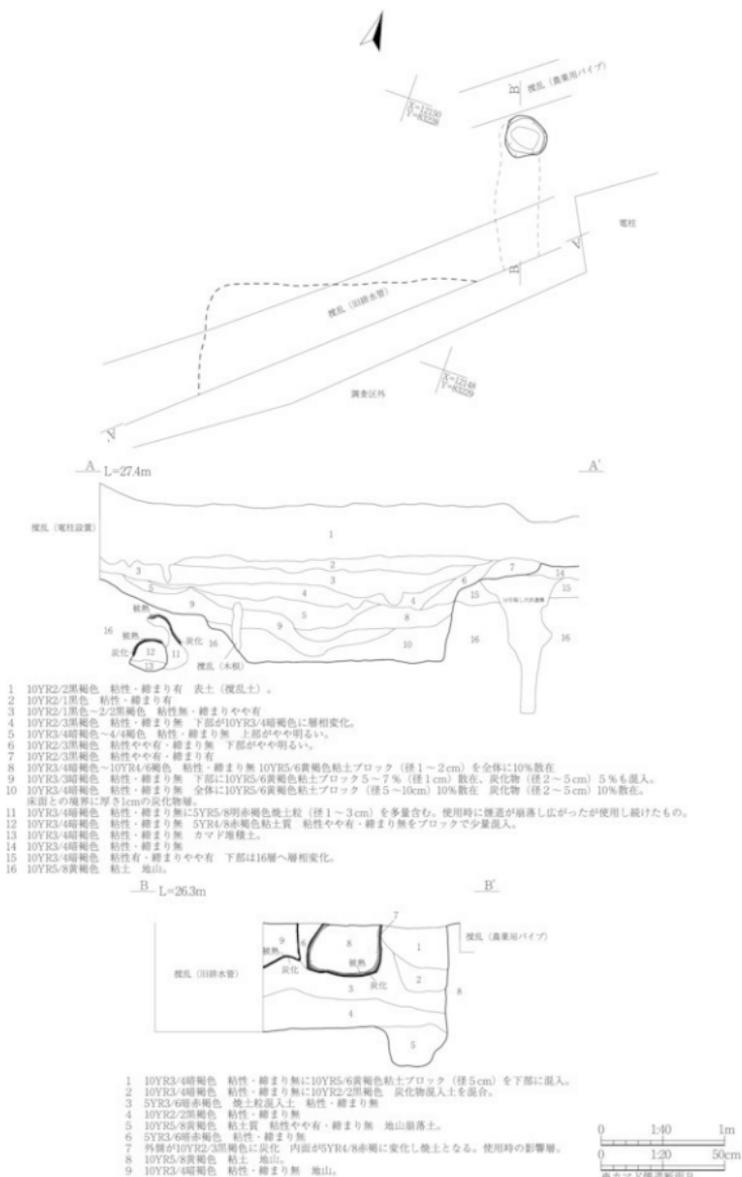
遺構（第23図、写真図版19）

東区東畑地部分のX=12149、Y=83228付近に位置する。I層のU字溝埋設時の攪乱土を含む表土層を除去したV層上面で、調査区南に延びる方形の黒褐色プランとして検出した。調査区を縦断している旧排水管及び電柱の攪乱によって、遺構底面まで大きく破壊されている。

平面形は隅丸方形を呈しているが見られるが不明である。規模はいずれも残存を推定したもので、北壁〔2.24〕m、西壁〔0.9〕m、東・南壁は調査区外である。遺構の大半が調査区外で攪乱の影響もあり、形状は不明である。壁高が確認できるのは西壁で86cm、その他は不明である。壁は床から2/3程度は急斜度で外傾するが、上部は急に開く形状となる。

堆積土は16層に細分される。1層は攪乱土を含む表土、2～10層は遺構堆積土、11～13層はカマド堆積土、14～16層は基本層序及び地山土である。遺構堆積土は黒褐色～暗褐色主体で構成される。最下層の10層中には5～10cm大の黄褐色粘土ブロックや2～5cm大の炭化物が散在し、床面との境界には厚さ1cmの炭化物層が形成されている。これは9層中にも認められる。8層には粒径の小さい黄褐色粘土ブロックが含まれる。これらの堆積状況から、本遺構は焼失住居の可能性がある。12・13層はカマド煙道内に堆積したもので、煙道上部には被熱の影響で内部が焼土化、外部が炭化した使用時の痕跡が認められる。11層はカマド使用時に煙道内が崩落し広がったもので、上部にはトンネル状になっており、被熱の影響が残っている。床面は貼床されおらず、黄褐色粘土の地山土で構成されており、堅緻である。

カマドは北壁中央に1基設置されていると考えられる。煙道方位はN20°W。現代の攪乱によってカマド煙道の中間部分は破壊されている。袖や燃焼部は調査区外にある。煙道は残存値で（74）cmあり、全長では1.2m以上の長さであると思われる。底面はほぼ水平であるが、煙出し孔へ立ち上がる底面は約15cm掘り窪められている。煙道の中間部分には使用時に天井の一部に孔が空いた痕跡があり、側面は焼土化及び炭化している。煙出し孔は直径33×32cmの略円形で、底面までの深さは53cmある。煙道からはほぼ直角に列り貫かれている。煙道上部から煙出し孔側面までは被熱の影響により焼土化・炭化しており、使用時の痕跡が認められる。



第23図 8号竪穴住居跡

床面施設は検出範囲が狭く、確認されなかった。出土遺物なし。

(2) 土 坑

2号土坑

遺構 (第24図、写真図版20)

東区西ゴミステーション部分のX=11994、Y=83033付近に位置する。I層表土の畑耕作土を除去したV層上面で略円形の暗褐色プランとして検出した。1号溝跡と重複し、本遺構が旧期である。調査区を縦断している旧排水管の攪乱によって、遺構南東側が破壊されている。

平面形は略円形、規模は残存値で開口部が120×(94)cm、底部が96×(89)cm。断面形は皿形を呈し、底面から緩やかに立ち上がる形状である。

堆積土は5層に細分される。すべて遺構堆積土で、暗褐色土主体である。最下層の4層は褐色粘土質土であるが、やや被熱していると思われる明黄褐色ローム粒を混入する。5層は地山流入土である。

遺物 (第28図、写真図版24)

堆積土を中心に7点(29g)の土師器が出土した。内訳は、堆積土が6点(23g)、底面が1点(6g)である。このうち、40坏、41・42甕の計3点を掲載した。40はロクロ成形の坏、甕の成形方法は不明である。41は外面ケズリ・内面ナデ調整が施される。

出土した土師器坏から、平安時代に属すると考えられる。

3号土坑

遺構 (第24図、写真図版20)

東区西ゴミステーション部分のX=11995、Y=83034付近に位置する。I層表土の畑耕作土を除去したV層上面で、1号竪穴住居跡と重複する略円形の暗褐色プランとして検出した。1号竪穴住居跡と重複し、本遺構が新期である。調査区を縦断している旧排水管の攪乱によって、遺構南東半が破壊されている。

平面形は略円形、規模は残存値で開口部が164×(56)cm、底部が108×(33)cm。断面形は皿形を呈し、底面から緩やかに立ち上がる形状である。

堆積土は5層に細分される。すべて遺構堆積土で、暗褐色土主体である。底面は半ドーナツ状に被熱しているが、被熱層が1～2mmと薄く、断面図には反映されない。炭化物層はその直上に堆積している。堆積は西方向から流入してきたと考えられ、自然堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

(3) 溝 跡

1号溝跡

遺構 (第24図、写真図版21)

東区西ゴミステーション部分のX=11988～12000、Y=83023～83038付近に位置する。I層表土の畑耕作土を除去したV層上面で調査区北東及び南西方向に走る溝跡の黒色プランとして検出した。

平面形は北東～南西方向に延び、ややカーブするもののほぼ直線的である。規模は、長さ(9.04)m以上、開口部幅39～19cm、底部幅20～14cm、断面形は皿状、走向はN45.5～56°Eである。深さは28～18cm、底面レベルは西端で32.820m、中央で32.848m、東端で33.212mと東側がやや高くなる。

堆積土は、セクションAから8層に細分される。1層は表土で現在の畑耕作土層、2～4層は旧排水管理設時の埋土層、5～7層は黒褐色～暗褐色主体の遺構堆積土、8層は1号竪穴住居跡カマド煙

道の堆積土層である。堆積土はシルト質中心で締まっている。レンズ状堆積しており、自然堆積と考えられる。

遺物 (第28図、写真図版24)

堆積土中から土師器片2点(8g)が出土した。このうち、43號の体部破片を掲載した。成形方法は不明であるが、外面縦位ケズリ・内面ハケメ調整が施されている。

遺構の重複関係から、平安時代に属すると考えられる。

4 古代以降・時期不明

(1) 土 坑

4号土坑

遺構 (第25図、写真図版20)

東区東端部分のX=12186、Y=83272付近に位置する。I層表土の宅地造成土及び攪乱土を除去したV層上面で、不整形の暗褐色プランとして検出した。重複関係はない。

平面形は南側がやや歪な不整形で、規模は開口部が107×88cm、底部が92×63cm。断面形は鍋底形を呈し、底面から急に立ち上がる形状である。

堆積土は4層に細分される。1～3層は遺構堆積土、4層は地山土である。遺構堆積土は暗褐色主体で構成され、レンズ状に堆積している。自然堆積と考えられる。出土遺物はない。

(2) 溝 跡

2号溝跡

遺構 (第25図、写真図版21)

東区東畑地部分のX=12172、Y=83255付近に位置する。I層表土の畑耕作土を除去したV層黄褐色粘土上面で、調査区北東及び南西方向に走る溝状の黒色プランとして検出した。

平面形は北西-南東方向に延び、ややカーブするもののほぼ直線的である。規模は、長さ(2.22)m以上、開口部幅(1.2)m、底部幅72～83cm、断面形は皿形、走向はN65°Wである。深さは24cm、底面レベルは西端で25.221m、東端で25.368mと東側がやや高くなる。

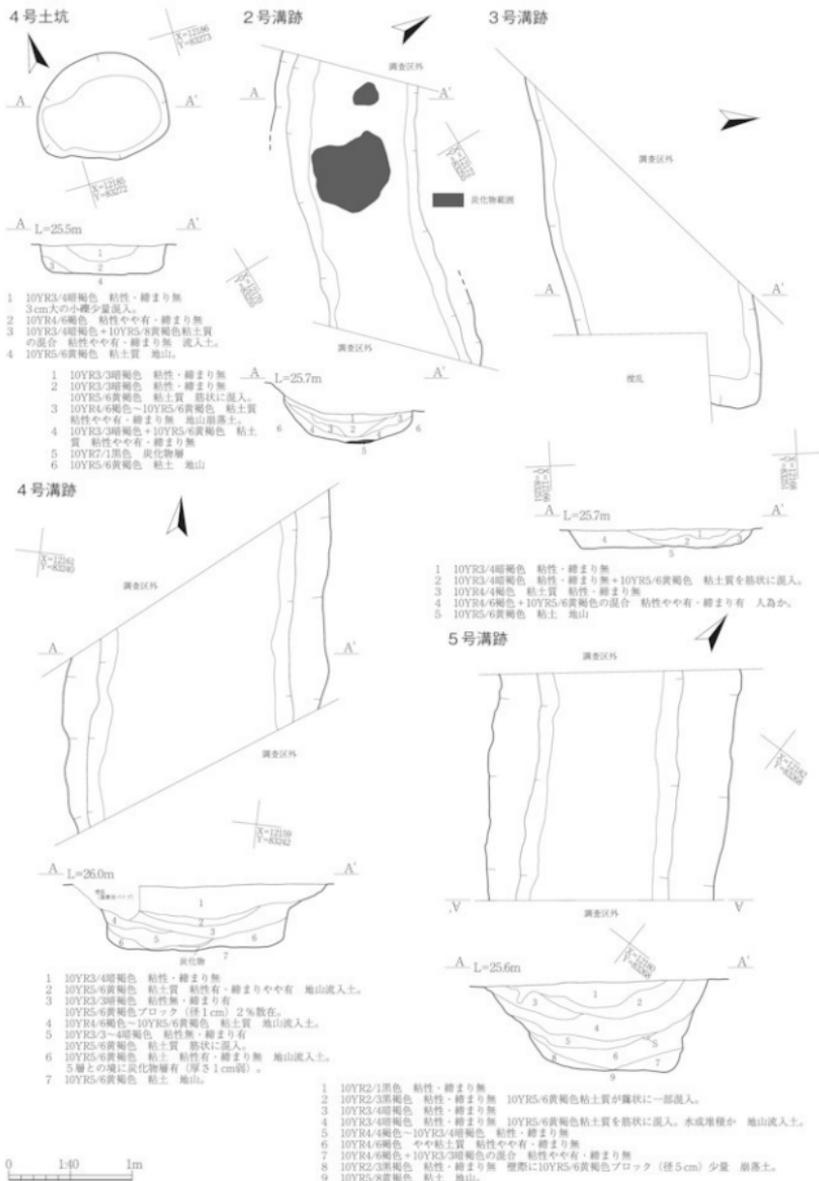
堆積土は、セクションAから6層に細分される。1～5層は遺構堆積土、6層は黄褐色粘土の地山土。最下層の5層は炭化物層で、厚さ約2cmで堆積している。平面形は62×60cmの不整形、22×18cmの2箇所が認められる。3・4層は地山再堆積土層、1・2層は自然流入土である。遺物の出土はない。

3号溝跡

遺構 (第25図、写真図版21)

東区東畑地部分のX=12168、Y=83251付近に位置する。I層表土の畑耕作土を除去したV層黄褐色粘土上面で、調査区西方向に延びる溝状の暗褐色プランとして検出した。

平面形は西方向に延び、ほぼ直線的である。調査区内で途切れており、端部は方形を成している。規模は、長さ(2.84)m以上、開口部幅(1.48)m、底部幅1.24～1.28cm、断面形は皿形、走向はN83.5°Eである。深さは15cm、底面レベルは西端で25.507m、東端で25.424mと西側がやや高いが平坦である。



第25図 4号土坑、2～5号溝跡

堆積土は、セクションAから5層に細分される。1～4層は遺構堆積土、5層は黄褐色粘土の地山土。最下層の4層は褐色土と黄褐色土の混合土で、人為堆積土の可能性はある。1～3層は自然流入土と考えられる。遺物の出土はない。

4号溝跡

遺構（第25図、写真図版22）

東区東畑地部分のX=12161、Y=83240付近に位置する。I層表土の畑耕作土を除去したV層黄褐色粘土上面で、調査区北及び南方向に走る溝状の暗褐色プランとして検出した。

平面形は北北西-南南東方向に延び、ほぼ直線的である。規模は、長さ(1.58)m以上、開口部幅2.13m、底部幅1.24～1.36mである。断面形は鍋底形で、底面からはほぼ垂直に立ち上がり、中央より上から急に開く形状となる。走向はN8°Wである。深さは52cm、底面レベルは北端で25.454m、南端で25.422mとほぼ平坦である。

堆積土は、セクションAから7層に細分される。1～6層は遺構堆積土、7層は黄褐色粘土の地山土。最下層の6層及び2・4層は黄褐色粘土の自然流入土。1・3・5層は暗褐色土主体の自然流入土である。遺物の出土はない。

5号溝跡

遺構（第25図、写真図版22）

東区東畑地部分のX=12182、Y=83268付近に位置する。I層表土の畑耕作土を除去したV層黄褐色粘土上面で、調査区北西及び南東方向に走る溝状の黒色プランとして検出した。

平面形は北西-南東方向に延び、ほぼ直線的である。規模は、長さ(1.86)m以上、開口部幅1.98m、底部幅84～99cm、断面形は鍋底形で、底面からはほぼ垂直に立ち上がり、中央より下から急に開く形状となる。走向はN35°Wである。深さは74cm、底面レベルは北西端で24.705m、東端で24.815mとほぼ平坦である。

堆積土は、セクションAから9層に細分される。1～8層は遺構堆積土、9層は黄褐色粘土の地山土。8層は地山崩落土混じりの黒褐色土、4層も同様の暗褐色土で、水成堆積の可能性はある。その他は自然流入土である。遺物の出土はない。

(3) 柱穴状ピット

P1～34柱穴状ピット

遺構（第26図、写真図版20）

計33個の柱穴状ピットを確認した。東区西ゴミステーション西側部分のX=11993、Y=83029にP1～4・11、東区筆界未定地西側部分のX=12015、Y=83059～83062にP7・8、東区西ゴミステーション東側部分のX=12004、Y=83045～83047にP6・9・10、東区西端部分のX=11960～11970、Y=82970～82995にP12～31・33、東区東端部分のX=12173～12175、Y=83258にP32、東区東住宅前部分のX=12099～12100、Y=83168にP34が位置する。P5は登録外である。

規模は開口部径の長軸が25.5～135.5cmの範囲で平均44.6cm、短軸が21.7～106.9cmの範囲で平均37.4cm、底部径の長軸が11.0～124.4cmの範囲で平均27.5cm、短軸が8.3～60.9cmの範囲で平均20.4cm、深さが8.6～68.0cmの範囲で平均28.7cmである。底面標高は25.349～34.574mの範囲である。平面形は円形・略円形が大半で、断面形は逆台形を呈するものが多い。柱穴として用いられていたと考えられ

るものがほとんどで、掘り方を伴う堆積をするものが多い。この場合、柱痕は黒褐色土、掘り方は地山に起因する黄褐色土となる。

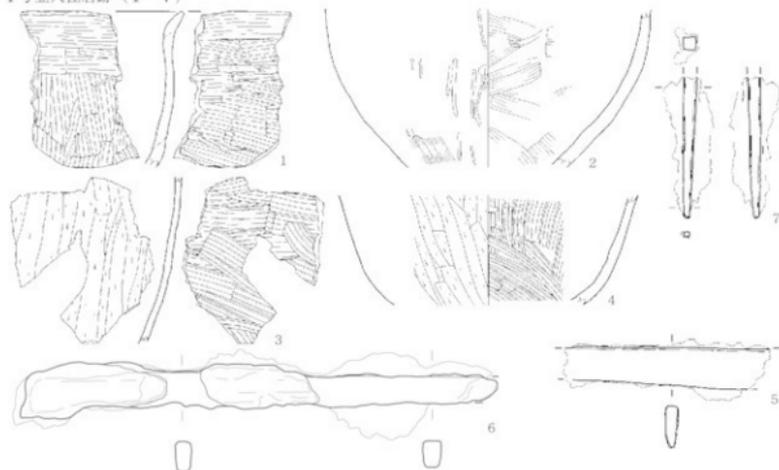
東区西端部分のP12～19の8個とP21～27の7個は直線に並んでおり、ほぼ並列している。P12～19は長さ18.4m、柱間寸法は2.4～2.7m、軸方向はN76.5° E、P21～27は長さ16.3m、柱間寸法は2.4～2.7m、軸方向はN77° Eである。地域の方の情報では、この箇所には以前水田があったとのことから、稲架の可能性があるが不明である。また、東区西ゴミステーション西側部分のP1・2・4も直線的に並んでおり、規則性がある。長さは6.5m、柱間寸法は3.2～3.3m、軸方向はN72.5° Eとなり、底面には柱痕跡が確認される。東西方向にはこれ以上延びないことから、南北の調査区外へと続く建物跡の一部と考えられるが不明である。

その他の柱穴状ピットについては、規則性は認められない。P13から土師器片1点（2g）、P31から土師器片1点（1g）が出土しているが、流入の可能性もあり時期は不明である。

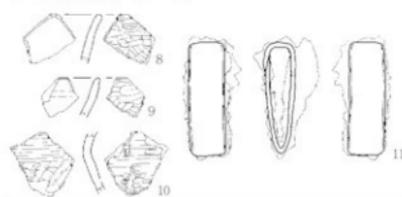
5 遺構外出土遺物

東区から土師器21点（152g）、金属製品1点が出土した。このうち、45銅片の1点を掲載した。東区西ゴミステーション東側部分の盛土層から出土している。時期は不明である。

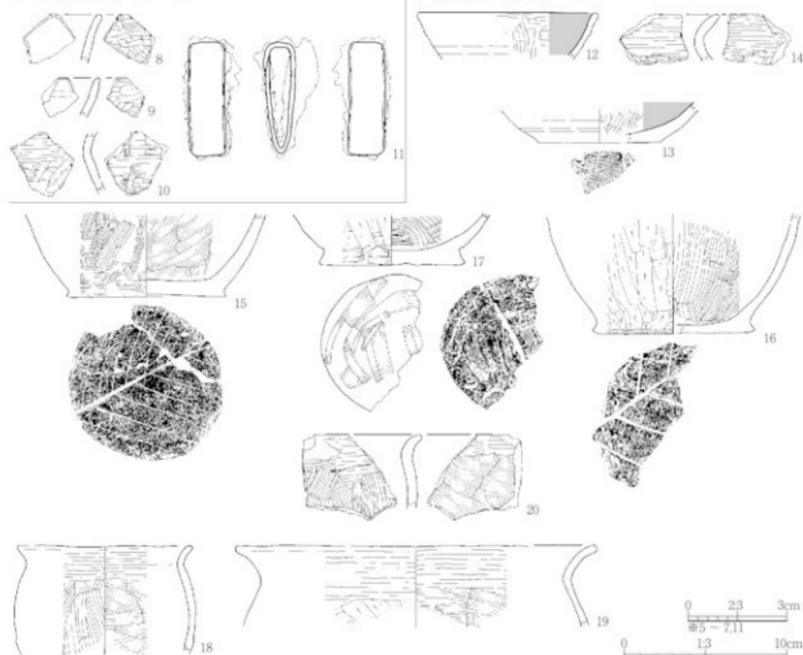
1号竖穴住居跡 (1~7)



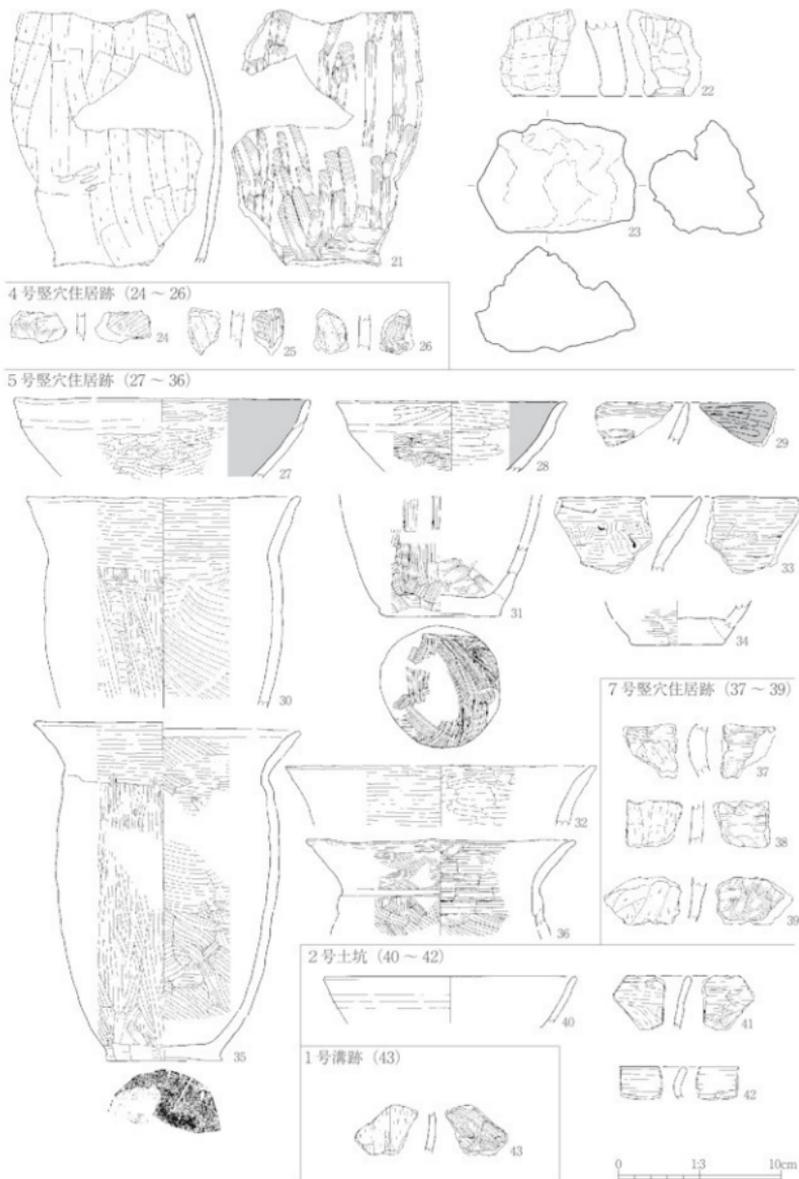
2号竖穴住居跡 (8~11)



3号竖穴住居跡 (12~23)

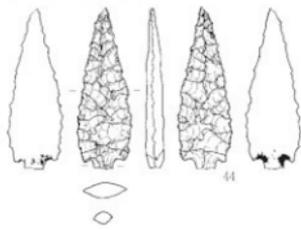


第27図 1~3号竖穴住居跡出土遺物

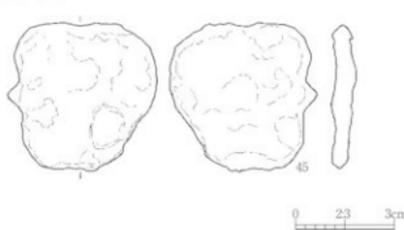


第28図 3~5・7号竖穴住居跡、2号土坑、1号溝跡出土遺物

11号簡し穴状遺構 (44)



遺構外 (45)



第29図 11号簡し穴状遺構、遺構外出土遺物

第2表 柱穴状ヒット計測表

遺構番号	地点		深 (cm)		土質	下層	層位	柱穴状ヒット (個)	備考
	X	Y	深	層位					
P 1	10901	83061	27.5	23.3	28.4	25.7	18.5	32,190	1. 109Y R 3 / 2 3 層褐色。粘質・細まわりや中層。黒出小アゴウツク 3% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.2m) 土台付。
P 2	11090	83029	47.0	30.6	28.3	15.1	16.2	32,178	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。109Y R 6 / 6 層黒褐色土アゴウツク混入。 2. 109Y R 3 / 2 3 層褐色。粘質・細まわりや。
P 3	11092	83029	23.5	26.0	14.6	18.4	33,006		1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 3 / 2 3 層褐色。粘質・細まわりや。
P 5								32,610	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。109Y R 6 / 6 層黒褐色土アゴウツク少量混入。
P 7	12001	83005	62.2	40.4	27.6	21.2	15.7	32,110	1. 109Y R 3 / 3 層褐色。粘質・細まわりやや中層。黒出小アゴウツク 3% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.2m) 土台付。 2. 109Y R 3 / 3 層褐色。粘質・細まわりや。
P 8	12015	83061	25.5	22.0	11.2	21.7	20.1	31,886	1. 109Y R 3 / 3 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.2m) 土台付。 2. 109Y R 3 / 3 層褐色。粘質・細まわりや。
P 9	12095	83046	31.5	32.4	36.2	21.1	33.1	32,178	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.2m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 10	12095	83009	30.0	35.1	27.7	22.2	31.6	32,147	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.2m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 11	12096	82992	30.0	25.5	20.0	19.8	20.9	32,485	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 12	13146	82977	38.9	41.5	41.4	26.4	25.4	34,284	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 13	11095	82979	41.8	31.7	26.8	20.0	23.5	34,149	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 14	11096	82982	30.0	33.0	32.5	21.6	21.2	34,067	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 15	11096	82985	37.8	35.8	23.6	18.6	26.2	33,560	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 16	11097	82987	40.9	39.2	27.6	25.6	28.2	32,839	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 17	11098	82990	57.6	42.4	22.5	21.6	28.0	33,743	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 18	11098	82992	39.8	39.8	23.1	20.1	25.0	33,792	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 19	11099	82990	31.3	31.3	17.0	11.9	13.7	33,622	49H
P 20	11097	82994	39.6	36.8	27.5	24.3	16.8	33,629	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 21	11094	82979	30.8	42.4	35.4	26.0	25.9	34,252	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 22	11095	82982	45.1	29.4	25.5	18.3	17.2	34,043	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 24	11096	82988	46.2	41.7	27.8	26.3	31.7	33,830	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 25	11096	82991	41.0	40.6	21.3	15.8	25.8	33,143	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 26	11097	82990	42.4	41.0	19.3	15.1	19.9	33,065	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 27	11092	82990	30.4	30.4	20.3	20.0	24.6	33,033	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 28	11092	82992	27.1	22.0	18.9	14.4	12.1	33,442	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 29	11098	82988	46.5	34.9	15.9	10.3	16.7	33,442	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 30	11096	82974	29.4	32.4	17.9	10.2	18.1	34,266	1. 109Y R 3 / 3 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 4 / 4 層褐色。粘質・細まわりや。
P 31	11099	82990	30.1	30.5	24.1	22.7	16.9	33,666	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 4 / 4 層褐色。粘質・細まわりや。
P 32	12174	82937	33.5	39.9	32.4	46.9	25.7	25,209	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 4 / 4 層褐色。粘質・細まわりや。
P 34	11092	82991	33.5	25.6	21.0	16.1	14.1	33,148	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。
P 38	12100	83107	34.7	37.5	28.5	24.0	24.0	27,866	1. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。黒出小アゴウツク 2% 混入。全体的に黒出層。 (計 1.4m) 土台付。 2. 109Y R 2 / 2 層褐色。粘質・細まわりや。

第4表 石器観察表

掲載№	登録№	写真No	出土地点		層位	種類	法量 (cm)			石材	欠損	備考
			区	位置 (グリッド)			長さ	幅	厚さ			
44	44	29	東	11号掘し穴状遺構	堆積土下位	石織	(4.95)	1.70	0.55	4.1	頁岩	有蓋蓋・基部に黒色着色物付着
46	46	—	東	1号壜穴住居跡	堆積土下部	素材				0.6	琥珀	

第5表 金属製品観察表

掲載№	登録№	写真No	区	遺構名	位置 (グリッド)	層位	種類	器種	残存位置	法量 (cm・g)			材質	備考	
										長さ	幅	重量 (調査)			
															厚さ
5	5	27	東	1号壜穴住居跡		堆積土下部 (鉄・焼土層下部)	鉄製品	刀子		(6.30)	1.30	0.40	9.4	鉄	
6	6	27	東	1号壜穴住居跡		堆積土下部	鉄製品	刀子か		(14.50)	0.90	0.40	40.0	鉄	
7	7	27	東	1号壜穴住居跡		田排水管敷設内	鉄製品	釘		(4.35)	0.40	0.40	5.1	鉄	
11	11	27	東	2号壜穴住居跡		床直	鉄製品	刀金具		3.50	0.95	1.10	5.4	鉄	
23	23	28	東	3号壜穴住居跡		床面	鉄塊	鉄塊		3.45	4.80	3.20	86.1	鉄	
45	45	29	東			ゴミステーション東	鉄製品	鉄鍋		(4.55)	(4.50)	(0.60)	36.7	鉄	

第6表 出土炭化物観察表

番号	日付	出土地点	層位	樹種	樹種同定	備考
炭1	2010/10/8	1号壜穴住居跡	床面	クリ	有	床面炭1
炭2	2010/10/8	1号壜穴住居跡	床面	クリ	有	床面炭2
炭3	2010/10/8	1号壜穴住居跡	床面	クリ	有	床面炭3
炭4	2010/10/8	1号壜穴住居跡	床面	クリ	有	床面炭4
炭5	2010/10/8	1号壜穴住居跡	床面	クリ	有	床面炭5
炭6	2010/10/8	1号壜穴住居跡	床面	クリ・ナラ	有	床面炭6
炭7	2010/10/8	1号壜穴住居跡	床面	ナラ・ケヤキ	有	床面炭7
炭8	2010/10/8	1号壜穴住居跡	床面	クリ	有	床面炭8
炭9	2010/10/8	1号壜穴住居跡	床面	クリ	有	床面炭9
炭10	2010/10/8	1号壜穴住居跡	床面	クリ	有	床面炭10
炭11	2010/10/15	5号壜穴住居跡	床面	クリ	有	床面炭1
炭12	2010/10/15	5号壜穴住居跡	床面	クリ	有	床面炭2
炭13	2010/10/15	5号壜穴住居跡	床面	エンジュ (ケヤキ)	有	床面炭3
炭14	2010/10/15	5号壜穴住居跡	床面	ケヤキ	有	床面炭4
炭15	2010/10/15	5号壜穴住居跡	床面	ケヤキ	有	床面炭5
炭16	2010/10/15	5号壜穴住居跡	床面	エンジュ (ケヤキ)	有	床面炭6
炭17	2010/10/15	5号壜穴住居跡	床面	エンジュ (ケヤキ)	有	床面炭7
炭18	2010/10/15	5号壜穴住居跡	床面	エンジュ (ケヤキ)	有	床面炭8
炭19	2010/10/15	5号壜穴住居跡	床面	エンジュ (ケヤキ)	有	床面炭9
炭20	2010/10/15	5号壜穴住居跡	床面	エンジュ (ケヤキ)	有	床面炭10
炭21	2010/10/15	5号壜穴住居跡	床面		無	床面炭11
炭22	2010/10/15	5号壜穴住居跡	床面		無	床面炭12
炭23	2010/10/15	5号壜穴住居跡	床面		無	床面炭14
炭24	2010/10/15	5号壜穴住居跡	床面		無	床面炭15
炭25	2010/10/5	1号壜穴住居跡			無	炭サンプル (材)
炭26	2010/10/5	1号壜穴住居跡			無	炭サンプル
炭27	2010/9/21	2号壜穴住居跡	西側床直上		無	炭
炭28	2010/9/22	3号壜穴住居跡	17層 (床直)		無	炭化物
炭29	2010/9/21	3号壜穴住居跡	埋土一括		無	炭
炭30	2010/10/21	6号壜穴住居跡	カマド内埋土		無	炭
炭31	2010/10/18	7号壜穴住居跡	埋土一括		無	炭

V 自然科学分析

1 中平遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

（1）測定対象試料

中平遺跡は、岩手県九戸郡野田村第13地割84番地121ほか（北緯40° 06′ 02″、東経141° 48′ 37″）に所在する。測定対象試料は、5号竪穴住居跡床面出土土器付着炭化物（No1：IAAA-103013）、1号竪穴住居跡床面出土炭化物（No2：IAAA-103014）、2号竪穴住居跡床直出土炭化物（No3：IAAA-103015）の合計3点である（表1）。No1は土器の内面から採取された。No2は焼失住居の床面から出土し、住居構築材と考えられている。

（2）測定の意義

遺構の廃棄年代を明らかにする。

（3）化学処理工程

- [1] メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- [2] 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- [3] 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- [4] 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- [5] 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- [6] グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（4）測定方法

3MVタンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした¹⁴C-AMS専用装置を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁵N濃度（¹⁵N/¹⁴N）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（5）算出方法

- [1] δ¹³Cは、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- [2] ¹⁴C年代（Libby Age:yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、

1950年を基準年(0 yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- [3] pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- [4] 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

(6) 測定結果

試料の ^{14}C 年代は、5号竪穴住居跡床面出土土器付着炭化物No1が $1430\pm 30\text{yrBP}$ 、1号竪穴住居跡床面出土炭化物No2が $1120\pm 30\text{yrBP}$ 、2号竪穴住居跡床直出土炭化物No3が $1250\pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1σ)は、No1が $610\sim 647\text{cal AD}$ の範囲、No2が $895\sim 971\text{cal AD}$ の間に3つの範囲、No3が $691\sim 777\text{cal AD}$ の間に2つの範囲で示される。

試料の炭素含有率を見ると、No2とNo3はいずれも60%を超える十分な値であるが、No1は約45%と若干低い値となっている。化学処理、測定上の問題は特に認められない。

表1

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-100013	No1	5号竪穴住居跡 床面	土器付着炭化物	AaA	-24.06 ± 0.43	$1,430\pm 30$	83.70 ± 0.27
IAAA-100014	No2	1号竪穴住居跡 床面	炭化物	AAA	-27.75 ± 0.59	$1,120\pm 30$	87.01 ± 0.28
IAAA-100015	No3	2号竪穴住居跡 床直	炭化物	AAA	-26.03 ± 0.55	$1,250\pm 30$	85.54 ± 0.27

【#4156】

表 2

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-103013	1,410 \pm 30	83.87 \pm 0.27	1,428 \pm 26	610calAD - 647calAD (68.2%)	583calAD - 657calAD (95.4%)
IAAA-103014	1,160 \pm 20	86.52 \pm 0.26	1,117 \pm 26	805calAD - 904calAD (10.0%) 912calAD - 928calAD (16.8%) 933calAD - 971calAD (41.5%)	880calAD - 991calAD (95.4%)
IAAA-103015	1,270 \pm 20	85.36 \pm 0.25	1,254 \pm 25	691calAD - 750calAD (55.5%) 762calAD - 777calAD (12.7%)	675calAD - 824calAD (92.2%) 814calAD - 861calAD (3.2%)

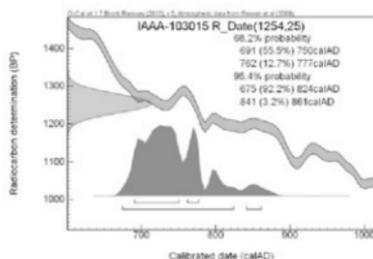
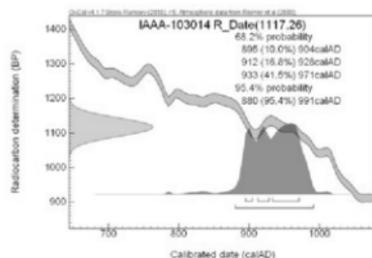
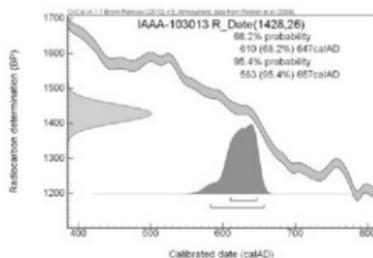
[参考値]

文献

Stuiver M. and Polach H. A. 1977 Discussion : Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360

Reimer, P. J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0 - 50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51 (4), 1111-1150



[参考] 暦年較正年代グラフ

2 中平遺跡出土の火山灰について

弘前大学大学院理工学研究科

柴 正敏・長沢知周

中平遺跡より採集された、火山灰サンプル1試料について、以下の観察・分析を行った。

本試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて構成鉱物の種類、火山ガラスの形態を記載した。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成及び共存鉱物などにより給源火山を推定することができる(Machida, 1999; 町田・新井, 2003; 町田・新井, 2006)。本報告では、電子プローブマイクロアナライザー(以下EPMA)を用いて、火山灰サンプル1試料に含まれる火山ガラスの化学組成を明らかにした。その結果を表2に示した。EPMAは弘前大学・機器分析センター所属の日本電子製JXA-8230を使用した。使用条件は、加速電圧15kV、試料電流 6×10^{-9} A、ビーム径10 μ mである。

本試料に含まれる火山ガラスは、ガラスの形態と構成鉱物(表1)及びEPMA分析値(表2)より、十和田aテフラ起源の火山ガラスに帰属される。本試料は、軽石型の火山ガラスを主とし、褐色ガラス(オブシディアン)を含む。構成鉱物は、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石及び鉄鉱である。また、径が0.5~2mm程度の軽石粒子を含む。

(引用文献)

- 青木かおり・町田 洋 (2006) 日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成、 K_2O-TiO_2 図によるテフラの識別。地質調査研究報告, 第57巻, 第7/8号, 239-258.
- Machida, H. (1999) Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan: Recent progress. 第四紀研究, 第38巻, 194-201.
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス, 日本列島とその周辺。東京大学出版会, 336p.
- 柴 正敏・重松直樹・佐々木 実 (2000) 青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成(1)。弘前大学理工学部研究報告, 第1巻, 第1号, 11-19.
- 柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実 (2001) 十和田火山, 降下軽石の化学組成変化 一字博部の一露頭を例として。弘前大学理工学部研究報告, 第4巻, 第1号, 11-17.

表1 中平遺跡火山灰試料

試料No	遺構名	層位	ガラス及び鉱物	軽石径	火山灰の帰属
中平遺跡試料	5号堅穴住居跡	3層	ガラス (pm>bw)、褐色ガラス、斜方輝石、単斜輝石、斜長石、石英、鉄鉱。	0.5~2mm	To-a

pm: 軽石型、bw: パブルウォール型、>: より多い、To-a: 十和田aテフラ

表2 中平遺跡、火山ガラスのEPMA分析値

中平遺跡採集火山灰試料													
		SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	n	Total	EPMA
中平遺跡サンプル	最小	74.79	0.28	12.52	1.70	0.00	0.29	1.68	4.11	1.33			
	最大	77.37	0.44	13.40	2.47	0.16	0.53	2.56	4.61	1.54			
	平均	76.56	0.36	12.75	2.03	0.09	0.38	2.03	4.40	1.42	14	98.579	WDS
	標準偏差	0.721	0.039	0.283	0.19	0.045	0.063	0.236	0.143	0.065			
十和田aテフラ													
青木・町田(2006)	To-a	77.75	0.36	12.73	1.62	0.09	0.38	1.81	3.90	1.37	19	98.41	WDS
	SID35												
	To-a	76.17	0.42	13.41	1.89	0.09	0.38	1.99	4.08	1.56	18	92.89	WDS
	SID 37												

FeO*: 全鉄をFeOとして計算した。*n: 分析粒子数を表す。WDS: 波長分散型EPMAを表す。

表3 中平遺跡サンプル、火山灰分析値

	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
	76.520	0.312	12.631	2.109	0.082	0.323	1.979	4.309	1.328	99.593
	72.982	0.291	12.010	1.611	0.149	0.272	1.588	4.193	1.458	94.554
	72.687	0.365	11.914	1.899	0.052	0.334	1.771	3.876	1.324	94.222
	75.967	0.342	12.291	1.867	0.117	0.396	1.803	4.094	1.305	98.182
	76.254	0.337	12.321	2.061	0.091	0.377	2.006	4.359	1.363	99.459
	76.837	0.362	12.511	2.122	0.046	0.368	1.936	4.274	1.417	99.873
	75.722	0.348	12.493	2.038	0.068	0.403	1.913	4.282	1.332	98.619
	73.732	0.377	13.141	2.120	0.004	0.439	2.448	4.415	1.371	98.047
	76.321	0.435	12.844	1.930	0.111	0.332	1.942	4.446	1.489	99.850
	76.870	0.388	12.321	1.816	0.096	0.419	1.968	4.492	1.436	100.006
	74.671	0.347	13.336	2.470	0.149	0.527	2.553	4.427	1.355	99.835
	76.090	0.377	12.632	1.923	0.061	0.430	2.025	4.366	1.506	99.400
	75.171	0.276	12.479	1.825	0.157	0.297	2.037	4.512	1.418	98.172
	76.660	0.360	12.630	2.169	0.104	0.384	1.940	4.623	1.425	100.296
最小値	72.687	0.276	11.914	1.611	0.004	0.272	1.588	3.876	1.305	94.222
最大値	76.870	0.435	13.336	2.470	0.157	0.527	2.553	4.623	1.506	100.296
平均	75.463	0.351	12.568	1.997	0.092	0.378	2.000	4.333	1.396	98.579
標準偏差	1.416	0.040	0.377	0.206	0.044	0.065	0.248	0.189	0.063	1.924
100%規格化										
	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	Total
	76.833	0.313	12.683	2.118	0.082	0.324	1.987	4.327	1.333	100.000
	77.186	0.306	12.702	1.704	0.158	0.288	1.679	4.435	1.542	100.000
	77.144	0.387	12.645	2.015	0.055	0.354	1.880	4.114	1.405	100.000
	77.374	0.348	12.519	1.902	0.119	0.403	1.836	4.170	1.329	100.000
	76.669	0.339	12.589	2.072	0.091	0.379	2.107	4.383	1.370	100.000
	76.935	0.362	12.327	2.125	0.046	0.368	1.938	4.279	1.419	100.000
	76.782	0.353	12.668	2.067	0.069	0.409	1.940	4.424	1.371	100.000
	75.201	0.385	13.403	2.162	0.004	0.448	2.497	4.503	1.398	100.000
	76.436	0.436	12.863	1.933	0.111	0.332	1.945	4.453	1.491	100.000
	76.865	0.388	12.520	1.816	0.096	0.419	1.968	4.492	1.436	100.000
	74.794	0.348	13.358	2.474	0.149	0.528	2.557	4.434	1.357	100.000
	76.549	0.379	12.708	1.935	0.061	0.423	2.037	4.392	1.515	100.000
	76.571	0.281	12.711	1.859	0.160	0.303	2.075	4.596	1.444	100.000
	76.434	0.359	12.933	2.163	0.104	0.383	1.934	4.609	1.422	100.000
最小値	74.794	0.281	12.519	1.704	0.004	0.288	1.679	4.114	1.329	100.000
最大値	77.374	0.436	13.403	2.474	0.160	0.528	2.557	4.609	1.542	100.000
平均	76.555	0.356	12.749	2.025	0.093	0.383	2.027	4.395	1.417	100.000
標準偏差	0.721	0.039	0.283	0.190	0.045	0.063	0.236	0.143	0.065	0.000

Ⅵ 調査のまとめ

検出した遺構は、縄文時代、古代、古代以降の3時期に区分される。縄文時代は土坑1基・陥し穴状遺構14基、古代は竪穴住居跡8棟・土坑2基・溝跡1条、古代以降または時期不明は土坑1基・溝跡4条・柱穴状ピット33個である。

出土した遺物は、土師器中コンテナ1箱・石器1点・金属製品6点・琥珀1点・炭化物サンプル31点である。

時期ごとの様相を概略して記す。

1 縄文時代

縄文時代の遺構は主に陥し穴状遺構で、いずれも溝状を呈する。西区1基、東区13基が検出されており、分布は全体から検出されているが、東区東側にやや多い傾向にある。規模は全形を確認できるのは2基のみで、1号は長辺2.56m、3号は3.5mである。長軸方向から見ると、N57°Eの3号やN63°Eの6号、N48°Eの13号など長辺が3.5m前後となる遺構は、長軸方位が東西方向となる傾向がある。これらの遺構同士はやや離れているが、同時期に構築された可能性がある。また、東区筆界未定地東部分の隣接する4・5号は、中央がやや膨らむ形状をしており、規模も類似することから、これらも同時期に構築された可能性がある。調査範囲が狭小なため、明確な配置を示す例はないが、前述の4・5号のように列配置を呈する可能性もある。陥し穴状遺構は東区東側に密集する傾向があり、明内川や泉沢川へ下る獣道沿いに連続的に構築されたと考えられる。また、現道部に埋設する下水管部分の調査を平成21年10月に生涯学習文化課が行った際には、西区から5基の陥し穴状遺構が確認されていることから、分布域は広いと考えられる。

遺構の所属時期については、時期を決定する遺物が出土していないため不明である。しかし、本遺跡の西500mの地点には縄文時代前期中葉～中期前葉の集落跡である平清水Ⅱ遺跡が存在しており、竪穴住居跡3棟や炉跡10基、土坑・墓坑104基、焼土42基など多量に検出されている。本調査で11号陥し穴状遺構から出土した有茎石鏃は長さ(4.95)cmとやや大きい。平清水Ⅱ遺跡出土の石鏃も大半が有茎で形状・規模が類似する。これらから、同時期の可能性も考えられる。

2 古代

今調査では東区から8棟の竪穴住居跡が確認された。出土遺物から、奈良時代に属する住居跡1棟、平安時代に属する住居跡5棟、不明だが古代に属すると思われる住居跡2棟である。

奈良時代に属するのは、5号竪穴住居跡である。東区東住宅前部分に位置し、住居の中央のみが検出された。カマドは調査区外であるが、調査範囲内の床面北側から燃焼部の一部と思われる焼土を確認している。このことから、カマドは北壁中央付近に設置されていると見られる。堆積土上位の3層にはにぶい黄褐色火山灰が混入しており、テフラ分析の結果、十和田aテフラに同定された(V-2参照)。堆積土中位から10世紀に降下したと考えられる十和田aテフラが確認されたことから、5号竪穴住居跡の廃絶後、10世紀に至るまで同遺構は完全に埋没せずに窪んでいたと推察される。遺物は床面を中心に出土しており、いずれも非ロクロ成形の土師器である。九戸地方のロクロ使用以前の土師

器を分類した羽柴氏の論考に依れば(羽柴1995)、坏は外面有段・丸底・前群より小型化、長胴甕の底部の突き出し具合の減少・前群より底径が大きくなることを特徴とする4群土器に比定され、8世紀前半に捉えられる。また、宇部氏の研究に依れば(宇部2007)、外面上段に段及び沈線を有する27~29黒色処理の坏は、底部形状が不明であるが坏B類の範疇と捉えられる。また、甕類は全形を見ることの出来る資料は30・35に限られるものの、概ね体部最大径が上位にあるものが多く、長胴甕A類と認められる。他器種は出土しておらず、坏は底部にハケメ調整がなされ(28)、口径が15cm前後、長胴甕は内外面ハケメ調整が施されることが主体となっていることから鑑みると、宇部編年の3段階(7世紀後葉~8世紀前葉)に捉えられる。

平安時代に属するのは、1~4・7号竪穴住居跡の5棟である。東区西半部に位置しており、1~3号の北壁中央にカマドが設置されている。1号は煙道の両脇に竪を設置した掘り込み式、2号は剣り貫き式で、カマド芯材には扁平礫を使用している。3号は煙道が短く付くタイプと思われる。カマドは擾乱の影響により不明である。7号のカマドは調査区外となる。住居の規模は全形を確認できる遺構がないため不明であるが、2号北辺から概ね一辺5m前後と考えられる。3号はそれよりもやや小規模となる。

出土遺物を遺構ごとに見ると、1号は坏の出土はなく、土器は非ロクロ成形の甕のみである。外面ケズリまたはハケメ・内面ハケメ調整を施すが、全形は確認できない。2号はロクロ成形の内面黒色処理坏及び非ロクロ成形の甕。3号はロクロ成形の回転糸切り無調整の内面黒色処理坏が出土し、甕類はいずれも非ロクロ成形と思われ、15~17底面には木葉痕、ナデ調整が認められる。外面はケズリ・ハケメ調整、内面はナデ・ハケメ調整が施される。4・7号はいずれも非ロクロ成形の甕類の破片のみが出土している。このように、坏の出土量が乏しいが、すべて楕形の回転糸切り無調整、内面黒色処理と考えられる。また、甕類はすべて非ロクロ成形であり、これらから9世紀中葉~後葉頃に位置付けられる。

3 古代以降

東区東畑地から東端部分にかけて、開口部幅が1.5~2m前後の規模を有する溝跡が4条確認された。3号を除く溝跡はいずれも調査区を横断しており、全体の規模は不明である。3号溝跡は調査区内で途切れているのが確認されており、途切れた箇所は土橋跡となるか、詳細は不明である。走向から見ると、4・5号溝跡と2・3号溝跡に分けられる。4号及び5号はそれぞれ、N8° W、N35° Wと南北方向に走っており、底面からはほぼ垂直に立ち上がって、中央付近から急に開く断面形状に類似点がある。2号及び3号は、N65° W、N83.5° Wと東西方向を基軸としている。4号溝跡については、平成21年10月に生涯学習文化課が行った調査の際にも、南北方向に直線的に走っているのが確認されている。

遺構の所属時期については、遺物が出土していないため不明であるが、5号溝跡が11・12号陥し穴状遺構を切っていることからこれよりは新期である。堆積状況から見ると、竪穴住居跡とほぼ同時期、もしくはやや下る可能性もある。排水溝としてはやや大形と捉えられることから、何らかの区画溝として機能していた可能性がある。

4 中平遺跡の古代遺構の位置付け

今回の調査では、8世紀前半に比定される土器を出土した奈良時代の堅穴住居跡1棟と9世紀中葉～後葉に比定される土器を出土した平安時代中期の堅穴住居跡5棟、その他に古代と考えられる堅穴住居跡2棟を検出した。

これまでの中平（野田堅穴）遺跡における過去の調査では、昭和27（1952）年に堅穴住居跡2棟と昭和40（1965）年7月に堅穴住居跡5棟が調査されており、昭和41（1966）年3月の堅穴住居跡と推定される窪地の分布調査では計185箇所が確認されている（草間1967・1969）。第5号住居跡からは、外面有段・底部丸底の坏や頸部に段のある長胴甕などが出土しており、すべてロクロ不使用の土師器である。これらは、今回の調査で出土した奈良時代の土器とほぼ同時期と考えられる。また、別に第3号住居跡からは、須恵器の長頸壺や球胴甕、土師器の坏・長胴甕が出土しており、今回出土のロクロ使用の土師器坏や木葉底のロクロ不使用の土師器の長胴甕が認められる。今回は須恵器は出土していないが、器形からはこれらもほぼ同時期の平安時代の土器と考えられる。

昭和41（1966）年3月の分布調査で確認された窪地は、その後宅地造成などが進み、今回調査を行った平成22（2011）年現在、大半は発見することが出来ない。しかし、これらがすべて堅穴住居の痕跡とすれば、少なくとも奈良時代前半と平安時代中期の集落が広がっており、これ以外の時期も連続して確認される可能性もある。

本遺跡から東に800mの地点に古館山遺跡がある。古館山遺跡は、昭和45（1970）年3月末～4月初旬にかけて、岩手大学草間氏と元野田小学校校長で野田村文化財調査委員の小笠原武氏、岩手大学学生5名により調査が行われた。古代の堅穴住居跡9棟・堀・土塁などが調査されたが、遺構図や記載が不明で、後に斎藤邦雄氏によって遺物編のみが刊行されている（野田村教委1987）。

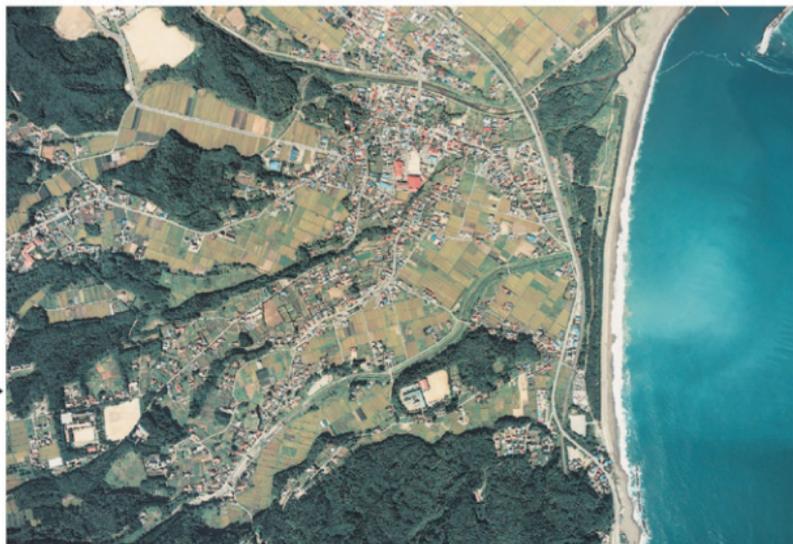
古館山遺跡は、岩手県沿岸北部から後北式土器が出土した数少ない遺跡として著名であるが、古代の中でも奈良時代に比定される土器を伴う堅穴住居跡が調査されている。斎藤はこれらを第Ⅰ～Ⅲ期の変遷を想定し、第Ⅰ期（8世紀前葉）を有段丸底や大型の坏・体部最大径を肩部付近にもつ、または直線的な器形・底径が小さい甕などで構成される土器群、第Ⅱ期（8世紀中葉）を有段丸底や無段丸底、大型や平底の坏・頸部に極端な凹凸や底部の突出などを有した甕などで構成される複雑な様相を呈する土器群、第Ⅲ期（8世紀後半）を無段丸底または平底・小型の坏や強く外反・複数の段を持つ口縁の甕などから構成される土器群に分類している。

今回の調査で5号堅穴住居跡から出土した土器は、前述の通り8世紀前半と位置付けており、古館山変遷に当て嵌めれば第Ⅰ～Ⅱ期に含まれ、第Ⅱ期とほぼ同時期であると考えられる。本遺跡では、過去の調査も含めて、平安時代と考えられる遺構が多く調査され、奈良時代の遺構が少ない傾向がある。同期の中心的な集落は海沿いの丘陵地である古館山遺跡周辺に分布している可能性もある。

参考文献

- 岩手県教委 1956 「土師器時代とその遺跡」『岩手の文化財』
宇部 則保 2007 「東北・北海道における6～8世紀の土器変遷と地域の相互関係 ix、青森県南部～岩手県北部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北大学文学部 p260～284
草間 俊一 1967 「野田村中平遺跡」『Artes Liberales』No.2 岩手大学教養学部 p36～48
草間 俊一 1969 「中平・上明内調査概報」野田村教委
草間 俊一 1972 「岩手県野田村中平遺跡第二次調査概要」『岩手史学研究』No.58 p30～38
（財）岩理文 2004 「平清水Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第449集
野田村教委 1987 「古館山～昭和45年三日市場遺跡発掘調査報告書（遺物編）一」
羽柴 直人 1995 「岩手県九戸地方のロクロ使用以前の土師器」『紀要XV』（財）岩理文 p23～44

写真図版



▲ 遠景（上が北、右は太平洋）

▶▲の交点が遺跡位置



近景（上が北）



▲
遠景（上が北、右は太平洋）

▶▲の交点が通陸位置



近景（上が北）



遠景（上が北、右は太平洋）

▶▲の交点が通称位置



近景（上が北）



1号土坑平面（東から）



1号土坑断面（東から）



1号陥し穴状遺構平面（南西から）



1号陥し穴状遺構断面（北東から）



2号陥し穴状遺構平面（南西から）



2号陥し穴状遺構断面（南西から）



3号陥し穴状遺構平面（東から）



3号陥し穴状遺構断面（西から）

写真図版4 1号土坑、1～3号陥し穴状遺構



4号陥し穴状遺構平面（南から）



4号陥し穴状遺構断面（南から）



5号陥し穴状遺構平面（南から）



5号陥し穴状遺構断面（南から）



6号陥し穴状遺構平面（西から）



6号陥し穴状遺構断面（西から）



7号陥し穴状遺構平面（南から）



7号陥し穴状遺構断面（北から）



8号陥し穴状遺構平面（南東から）



8号陥し穴状遺構断面（南東から）



9号陥し穴状遺構平面（北西から）



9号陥し穴状遺構断面（北西から）



10号陥し穴状遺構平面（南東から）



10号陥し穴状遺構断面（南東から）



11・12号陥し穴状遺構平面（南東から）



11・12号陥し穴状遺構断面（南東から）



13号陥し穴状遺構平面（北から）



13号陥し穴状遺構断面（北から）



14号陥し穴状遺構平面（南から）



14号陥し穴状遺構断面（南から）



2号竪穴住居遺構検出（東から）



東区1・2号竪穴住居跡付近検出（北西から）



東区3号竪穴住居跡検出（北西から）



東区東端検出（北東から）



平面（北から）



断面（北から）

写真図版 8 1号竪穴住居跡（1）



炭化物・焼土出土状況（西から）



カマド袖部・焼土部断面（北から）



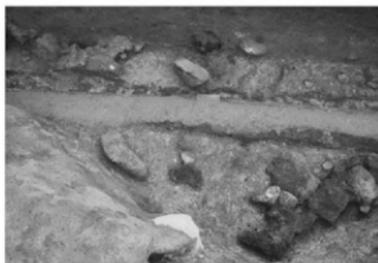
カマド天井材出土状況



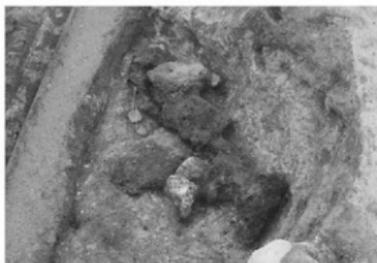
カマド煙道部断面（西から）



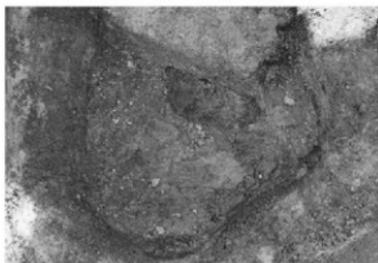
カマド煙道部断面（南から）



床面炭化物・焼土出土状況（北西から）



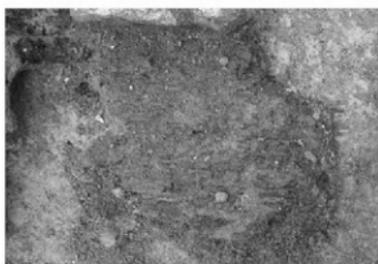
床面北西隅炭化物・焼土出土状況（北から）



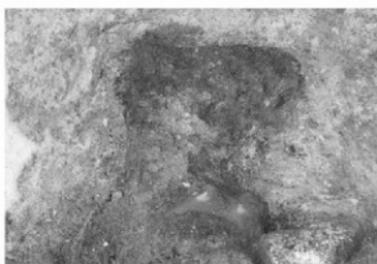
床面出土炭化材1（クリ）



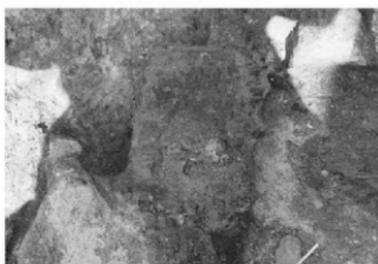
床面出土炭化材2（クリ）



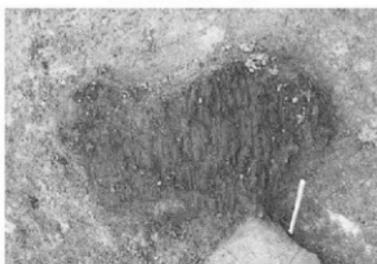
床面出土炭化材3（クリ）



床面出土炭化材4（クリ）



床面出土炭化材5（クリ）



床面出土炭化材6（クリ・ナラ）



東半部平面（東から）



西半部平面（南東から）



断面（西から）



カマド平面（南西から）



カマド天井石・補石出土状況（北から）



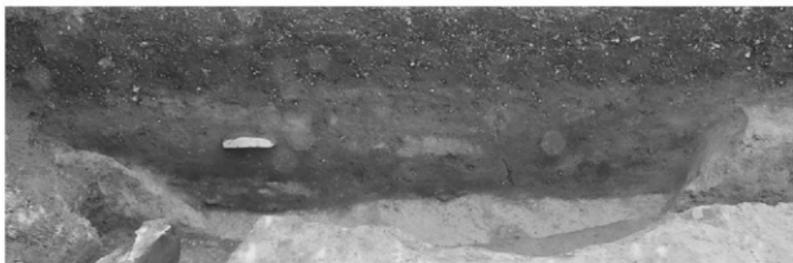
カマド断面（南西から）



カマド煙出部断面（東から）



平面（西から）



断面（北西から）



カマド燃焼部平面（北西から）



床面鉄塊出土状況（北西から）



平面（南から）



断面（南東から）



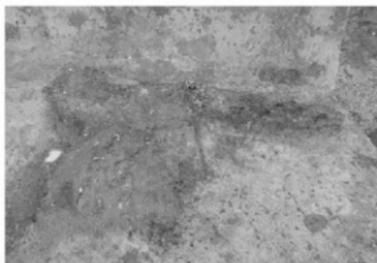
平面（東から）



断面（南西から）



床面遺物・炭化物出土状況（西から）



床面炭化物出土状況（西から）



カマド燃焼部平面（南東から）



カマド燃焼部断面（南東から）



住居振り方西半部平面（南東から）



床面土器出土状況（30）



床面土器出土状況（31）



床面土器出土状況（35）



平面（南から）



断面（北西から）



平面（西から）



断面（南から）



住居振り方平面（西から）



床面礫出土状況（南から）



平面（南東から）



断面（北西から）



カマド煙道部断面（東から）



カマド煙出部断面（東から）



2号土坑平面（北東から）



2号土坑断面（南西から）



2号土坑検出（北東から）



調査寸景



3号土坑平面（南東から）



3号土坑断面（南東から）



4号土坑平面（北西から）



4号土坑断面（南東から）



1号溝跡平面 (南西から)



1号溝跡平面 (南西から)



1号溝跡平面 (北東から)



1号溝跡断面 (南西から)



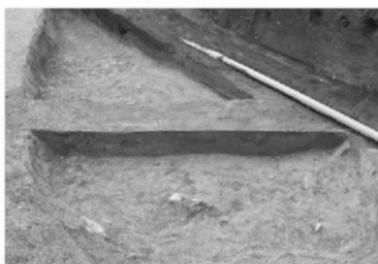
2号溝跡平面 (南東から)



2号溝跡断面 (南東から)



3号溝跡平面 (南東から)



3号溝跡断面 (南東から)



4号溝跡平面（南から）



4号溝跡断面（南から）



5号溝跡平面（北西から）



5号溝跡断面（北西から）



P1～4ピット平面（北東から）



東区西端ピット群平面（東から）

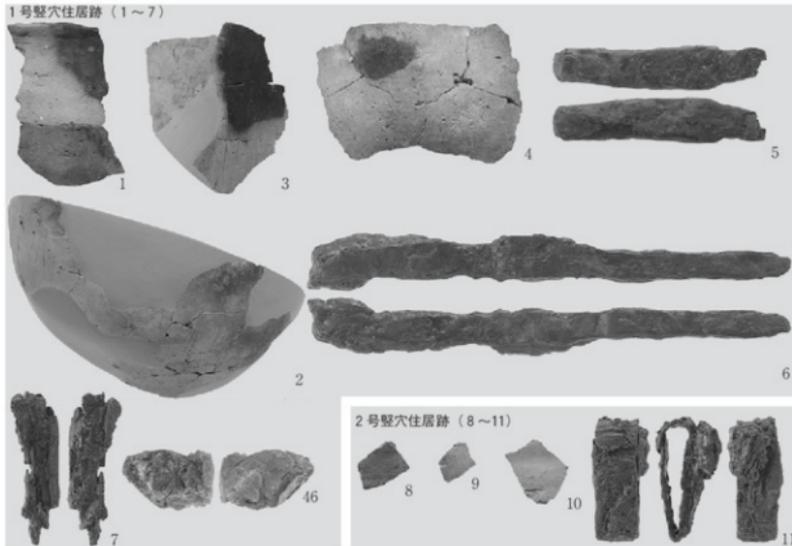


調査区埋め戻し風景

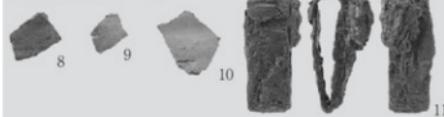


野田中から太平洋を望む

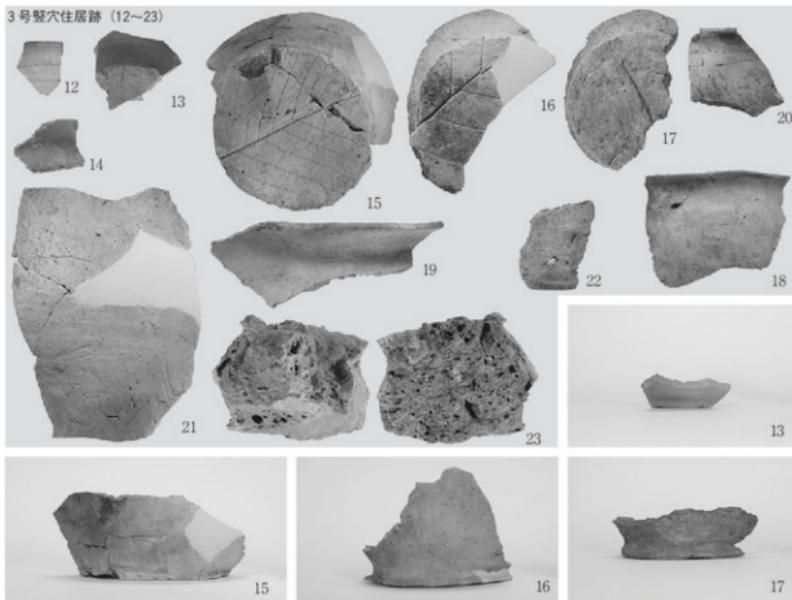
1号竖穴住居跡 (1~7)



2号竖穴住居跡 (8~11)



3号竖穴住居跡 (12~23)



S = 1/3 (5~7・11・23・46) S = 2/3

写真図版23 1~3号竖穴住居跡出土遺物



S= 1 / 3 (44・45はS= 2 / 3)

報告書抄録

ふりがな	なかたいいせきはくつちょうさほうこくしょ								
書名	中平遺跡発掘調査報告書								
副書名	村道拡幅事業関連遺跡発掘調査								
巻次									
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第602集								
編著者名	北田 勲								
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター								
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638 - 9001								
発行年月日	2012年3月6日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
中平遺跡	岩手県九戸郡 野田村第13地 割84番地121 ほか	03503	JG60-0258	40度 06分 02秒	141度 48分 37秒	2010.09.01 ～ 2010.10.29	2,736㎡	村道拡幅事業に 係る発掘調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
中平遺跡	集落跡	縄文時代	土坑 陥し穴状遺構	1基 14基	石鎌1点				
		古代	竪穴住居跡 土坑 溝跡	8棟 2基 1条	土師器 金属製品(刀子・釘・ 刀金具など)				
		古代以降 時期不明	土坑 溝跡 柱穴状ピット	1基 4条 33個					
要約	<p>中平遺跡は、昭和29(1954)年に「野田竪穴住居址群」として県指定史跡に登録され、昭和40・41(1965・1966)年には岩手大学の草間俊一氏により調査が行われ、百数十箇所(185棟以上)の古代の竪穴住居址群が確認された。</p> <p>今回の調査範囲は、過去の調査地点よりも東に位置し、西区はほぼ同一丘陵上、東区は一段下がった平坦地である。縄文時代の陥し穴状遺構や土坑などを検出したが、主となる遺構は前述の草間氏による調査でも多く見つかっている古代の竪穴住居跡が8棟確認できた。検出した住居跡はすべて一段下がった平坦地に認められ、中平遺跡の集落範囲が舌状に広がる東側にも拡大することが分かった。</p> <p>また、古代以外の遺構も確認され、長期間に亘る人間活動の痕跡の一端が明らかとなった。</p>								

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第602集

中平遺跡発掘調査報告書

村道拡幅事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成24年3月1日

発行 平成24年3月6日

編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001

発行 野田村
〒028-8201 岩手県九戸郡野田村大字野田第20地割14番地
電話 (0194) 78-2111

(公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 654-2235

印刷 小松総合印刷株式会社
〒020-0827 岩手県盛岡市鉾屋町15番4号
電話 (019) 624-1374